

---

# 呪願鏡

ゆかりゆか。

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

呪願鏡

### 【Nコード】

N0229G

### 【作者名】

ゆかりゆか。

### 【あらすじ】

あるお城の王妃は、出産を控えていました。王子を望まれているのに、女の子が欲しいと祈った王妃のもとに、差出人不明の贈り物「鏡」が届きます…白雪姫が15歳になった年、呪いの鏡は目覚める…

## はじめり（前書き）

白雪姫をモチーフにした、  
ちよっぴりホラーな話です。

お話自体は怖い（と思う）のですが、  
童話の白雪姫を題材に使っているため、  
ジャンルは童話にしました。  
登場人物が陽気なので、  
あまり怖くはないと思いますが・・・

## はじまり

天気の良い、ある冬も終わりの頃、  
アルフ国の城下町に、  
城の王妃が王とやって来た。

本来ならば王が王妃とやって来た。  
なのだが、今日のメインは王妃自身なのだ。

王妃は数週間後に出産を控えていた。

そのための安産祈願に  
城から少し離れた統治町の寺院に来たのだった。

城はこの町の東にある  
小高い丘の上に建っている。

たくさんの近衛兵や従者、  
侍女達を引き連れた大名行列さながらの人波は、  
何でもない町の一日を  
途端にお祭騒ぎに変えた。

通りに面した店や家の軒先には、  
まだ冬だというのに  
一足早い春の花で彩られ、  
子供たちは細かく刻んだ薄桃色の花紙を  
行列に向かって振り撒いている。

行列者達の足元に落ちた花紙は  
ひらひらと蝶々の様に舞った。

先頭を走る豪華な馬車の中で、  
王は満足げに民を見回していたが、  
隣に座る王妃は終始無言でうつむいたままだ。

初め王妃は人目を忍び、  
少ない従者を連れて  
寺院におもむくつもりでいたのだが、  
反してお祭り好きな王は、  
ここぞとばかりに美しい王妃を国中の者達に  
見せ付ける計画に走ったのだった。

王妃は美しかった。

十八の歳の春の日、  
アルフ城に嫁いできた。

美しく由緒正しき貴族出身。  
と言うだけで、王妃の評判は上々だったが、  
それよりなにより、とても優しい方なのだ。

王妃の優しさは、  
しばしば国民の心を救ったものだ。

多少のミスを犯しても、

たいてい王妃の口添えで王は甘くなる。

みな王妃を慕っていた。

たとえ忍んで来ようとも、

国民は王妃を祝福しようと思集まったに違いない。

国は豊かで平穏な日々を送っていた・・・。

「見た見た王妃様！

やっぱり、おキレイよねー！」

娘達は王妃の姿を見るたび感嘆の声を上げ、ほーっと息をつく。

「王妃様のお子様なら、

きっと天使の様に愛らしいでしょうね」

そんな言葉が囁かれる中、

王妃は王に手を取られ、

静かな足取りで寺院の奥に姿を消した。

王子に恵まれますように。と願うために・・・。

「お疲れになったでしょう王妃様。

少しお休みになられると良いですわ」

寺院から戻った王妃を迎えたのは

侍女のエレンだ。

彼女は王妃がここに嫁いで来た時、  
お付きの侍女として

王妃の母国から一緒にやってきた。

王妃の家で下働きをしていた女の娘で、  
王妃とは、ほとんど生まれた時からの  
付き合いである。

そして何でも話せる良い友人でもあった。

いくら王の妻だと言っても、  
しょせんは余所者。

些細な会話にも気を使う。

王妃が真の心の内を話せる人物は  
城内にはエレンしかいなかった。

エレンは王妃の肩にショールを掛けると  
暖炉に火を入れる。

王妃は無言で窓辺まで歩いて行くと、  
お気に入りのお椅子に腰掛け  
「はあー」

と大きな息をついた。

「どうかしましたか？」

エレンは心配そうに王妃の横顔を覗き込んだ。

白く澄んだ肌の色は、どこことなく青白い。

王妃は自分を見詰めるエレンに顔を向けると、サファイアのように光る瞳で彼女を見詰めた。

「私は王を裏切るようなまねを、  
してしまっただわ！」

王妃は蒼白な顔で呟くと、  
金の巻き毛を振り乱して首を振った。

まさか、お腹の子は王様の子ではない！  
なんて言うんじゃない！！

ゴシップな考えをエレンは思い浮べたが、  
それはすぐに王妃自身の口によって打ち消された。

「寺院で女の子が産まれますように、  
と祈ってしまったの」

王妃は形の良い眉を寄せた。

顔色はますます悪くなり、

今ではすっかり血の気が失せて蠟人形の様だ。

そんな思い詰めた王妃の言葉に、



エレンは何だそんなこと。  
とでも言いたげな表情で、

「男か女かなんて、  
今祈ったから変わるなんて事はないんですよ。  
女は女だし、男は男です。」

寺院に行つて王子がほしいと祈るなんて、  
ただの気休めにすぎませんよ。しかも今更」

ニツコリ笑つて王妃の肩を叩く。

「それはそうですが・・・」

分かつていても王妃は浮かない顔だ。

沈んだ表情の王妃の気を紛らわせる様に、  
エレンは大きく手を叩くと、

「そついえば王妃様に  
贈り物が届いていましたっけ」

部屋の隅の壁に立て掛けてあつた  
大きな包みを持つてくる。

正方形に近い形の、あまり厚みがない物で、  
想像するところ絵画ではないだろうか？

この地では妊婦に美しい絵を贈ると  
教養あふれる子供が産まれると言われている。

王妃もエレンも疑わなかった。

包みの中は絵画だろうと・・・。

「まあ！」

上品な薄紙を丁寧にはがし、  
中を取り出した途端  
エレンは声を上げた。

それは絵などではなく、  
大きな絵画ほどもある大鏡だったのだ。

「すごい！ 素敵な鏡ですね」

エレンは王妃の前に鏡を差し出した。

胸の前で抱える様にして持ったせいで、  
小柄なエレンの半身は、  
鏡の影にすっぽりとかくれてしまう。  
それほど大きな鏡なのだ。

金縁飾りの大鏡は  
窓から差し込む日の光を受けて  
真夏の水面の様に輝いた。

腕の良い鍛冶屋が打った剣の刃にも似ている。

「キレイだけど、かなり古い物みたいね。  
アンティークかしら？」

王妃はエレンが持っている鏡を見詰め、その表面を撫でた。

鏡はひんやりとした冷気を帯びており、王妃が触れた所だけ体温で白く曇った。

寒い部屋の中に長いこと置いてあつたせいだろう。

先程くべた暖炉の火が今になって、ようやく大きくなってきた。

「ホントですね。

誰がくれたのか判らないから、いつごろの物が判りませんね」

エレンは鏡の脇から顔を出し王妃に話した。

「それにしても妊婦に贈り物をする時、名前を明かさずについていうのは、どうも・・・」

王妃は鏡に映る自分の姿を見詰め眉を寄せた。

「国によって、

いろんな習慣が残っているんですよ。

妊婦に名入りで贈り物をする時、

子供を狙って悪い霊が付いて来るって言われているんですって。

私達の母国ではなかった話ですよね？」

エレンは首を傾げて呟いたが、その呟きの為何かを思い出したのか「あっ！」と声を上げる。

それが悲鳴に近い叫びだったので、王妃は心配そうにエレンを見た。

エレンは慌てて口をつぐみ、

「何でもありません！」

ぶんぶん首を振って話をそらそうとした。

ところがカンの良い王妃は、エレンの悲鳴の意味に気付いたらしい。

「私たちの国では妊婦に鏡を贈ると、毎日鏡を見詰めても飽きないほどに美しい女の子が産まれるって話があったわよね・・・」

「そーんなことは、ただの言い伝えですってば！」

エレンは王妃の言葉に割って入り、大声で叫んだ。

まったく、とんでもない贈り物をしてくれたもんだ！

エレンは目を細めて鏡を睨み付けると  
「あら？」と声を上げる。

ただ何となく自然に出た言葉だったが、  
その声は沈んだ気持ちの王妃の興味を引いた。

「これ、なんでしょうね？」

エレンは鏡を床に置き、

王妃の方へ向けて立てた。

エレンの右手人差し指は、  
鏡の下方に向けられている。

王妃はエレンの示す方へ目を向けると、  
指をのばした。

そこには何か鋭いもので  
傷つけられたような跡があったのだ。

粘土をナイフで削ったような、  
そんな鋭さを持った文字であった。

そう、よく見るとそれは  
どこかの国の文字のように思えた。

王妃も、もちろんエレンも  
見たことのない文字である。

「模様には見えませんよね？」

エレンは王妃の同意を求めるように  
彼女を見る。

王妃は鏡に映った  
自分の姿を見詰めたまま黙り込んだ。

「外国の物かしらね？」

王妃は鏡の中からジッと自分を見詰める  
もう一人の自分を、  
しばらく凝視していた。

鏡は寸分変わらず王妃の美しい姿を映し出している。

ただ一つ、左右逆と言う点を除いて・・・。

ほどなくして王妃は子を産んだ。

王妃の心配どおり女の子であった。

しかし王妃の思いに反して  
城の者達の態度は寛大で、  
誰一人として咎める者はいなかった。

可愛らしい女兒は白雪と名付けられた。

白雪の美しさは、  
見るものすべての心を奪った。

名前の通り雪のように白い肌。

髪は夜の闇よりも黒く、  
小さく愛らしい唇は紅も引かぬのに  
いつでも赤く艶やかだ。

白雪はやがて、  
王妃の美しさをも凌ぐであろうと  
人々は噂した。

城人、国民の愛を一身に受け、  
白雪はすくすく成長していったが、  
その後王妃は子に恵まれなかった。

「王子がいなくては、国の後継ぎが・・・」  
白雪がまだ幼い頃、  
王はそのことをよく口にし王妃を苦しめた。

しかし日がたつにつれ、  
白雪の美しさに拍車がかかり、  
やがて王の心を変えるまでにいたったのだ。

「白雪姫に、婿をとればよいのだ!」と。

その言葉からは

「こんなに可愛い娘を  
他国に嫁がせるなんてとんでもない!」

という王の思いが容易に感じ取れた。



## 鏡

「王妃様、見付けましたよ、ついに!」

白雪が十五才の誕生日を迎える年、

エレンが息咳切らしながら

王妃の部屋に飛び込んできた。

王妃は白雪と一緒に、

バルコニーでお茶を飲んでいた。

暦の上ではもう春だが朝晩は肌寒い。

春はもう少し先だろう。と思う反面、

昼間はだいぶ暖かった。

今日は天気も良いので

「バルコニーでお茶を」となったのだ。

白いテーブルにはティーセットが一式と

カップが三つ、

焼きたてのスコーンが置いてある。

スコーンはあらかじめ食べられた後であったが、

エレンが食するくらいの数は残っていた。

月日がたっても王妃にとって

エレンが特別な友人であるらしい事は

容易に想像できた。

エレンはバルコニーに出ると  
王妃と白雪の前で

『ついに見付けた物』を

テーブルの上に置いて見せた。

それは薄汚れた一冊の本だった。

かなりの年代物らしく、  
革の表紙は擦り切れていたし  
紙は黄色く変色している。

しかしボロボロな外見にもかかわらず、  
シツカリと一枚一枚ページはめくれたし、  
インクは気味悪いほど真っ黒であった。

その本は、よほど腕の良い紙職人とインク職人、  
そして製本人に恵まれたらしい。

「なあに、この汚い本？」

ブルーベリージャムをたっぷりぬった  
スコーンを頬張りながら、  
白雪はエレンを見た。

エレンはスカートのパケットから  
若草色のハンカチを取り出すと、

「もう姫様ったら、  
お顔にジャムがいっぱい付いていますよ。  
もしも、これがストロベリージャムだったら  
私、卒倒してしまうところでした!」

白雪の顔をごしごし擦り泣きそうな声で言う。

「いいのよ。」

食べ終わったら拭くつもりだったんだから。

ね、お母様」

白雪は膨れっ面でエレンを見上げると、  
向かい側の椅子に着いている王妃に同意を求めた。

王妃は答えずに口元に手をあてて、  
くすくす笑っている。

「もう、何よ!」

白雪がますます頬を膨らませると、

「そんなことより、これですよ!  
見てください!」

エレンは重そうな本のページを慎重にめくり、  
王妃と白雪の顔を見た。

「これ、あの鏡に書かれているのと同じ文字?」

白雪は紅茶を一気に飲み干すと

身を乗り出した。

「地下の書庫で見付けたのです。それにしても、この城の古本量は並じゃありませんね。」

十五年目にして、

やっと見付けることが出来たなんて、

これはもう奇跡としか言いようがありません！」

エレンは陶醉しきつた目で

春の青空を見詰め呟いた。

その際に白雪はその本を手にとると、初めの方のページを読み始めた。

「今から約百年ほど前、

北の山の麓にかわった文化を持つ一族がいた。

そのものたちは皆

天使の様に美しい容姿をもち、

とても長寿だった。

しかし、ある春の年、

天災にあい山から雪崩れ落ちてきた

土砂に埋もれ滅んだ・・・ですって」

白雪は著者の前書きを読むと

エレンの顔を見た。

「そんな話、聞いたことありませんよ」

エレンは首を振る。

白雪は再び本に目を移した。

「彼らは独自の文字を持つており、  
その文字はそれぞれが独立した力を持っていた。  
組合せによっては、  
不思議な力を起こす呪文になる  
魔文字と言ってもよい！」

白雪は嬉々とした声で叫ぶと、  
バネ仕掛けの人形のように立ち上がった。

「すごい！ 呪文ですって！！！」

白雪は目を輝かせた。

読書家の白雪は、  
どうでもいい知識だけは、たくさん持っていた。

その興味を勉学の方に向けてくれればよいのと、  
王妃はいつも考えていたが、  
そんなこと白雪は露ほども知らぬ事実だ。

「すごい、すごい！  
ねえ、あの鏡に書いてある文字、  
読んでみましょうよ！」

言うなり白雪は部屋に飛び込んだ。

「大丈夫かしら？」

王妃は心配顔でエレンを見た。

エレンはニツコリ微笑むと、

「大丈夫ですよ。」

魔文字は魔力を持つ者のが  
読まなくては呪文にならないんですよ」

王妃の手を取り部屋に導いた。

十五年間も書庫に通い詰めたエレンは、  
すっかり雑学知識人にかわっていたのだった。

白雪は鏡の前でペンとノートを持ち、  
丁寧にその文字を書き取っていった。

なんだか縦線がズラズラと  
意味なく並んでいるような形をしているが、  
よく見ると字に見えなくもない。

すべての文字を書き写した白雪は  
ノートを満足気に見詰めると、

「うふふふー！」

気味の悪い声で笑った。

「何が起こるのかしら、

キレイな宝石が山のように出るの？」

それとも私の美しさが倍増するとかー!？」

白雪はスキップでも踏みそうな勢いで部屋の中を跳ね回ったが、

エレンの言葉で、はたと動きを止めた。

「なんて読むのか分かりますか？」

氷のように冷たい言葉が

白雪の浮かれ心に突き刺さる。

「あああ！」

そんな発音記号までは書いていない！」

白雪はその場に膝をつくと

大袈裟に声を上げて身をふせた。

「ほらほら、

そんなところで一人芝居していないで。

お勉強の時間ですよ」

エレンは白雪の手を取り立ち上がらせると、王妃の部屋から追いたてた。

「やだやだ、勉強したくないー！」

白雪は駄々をこねたが、王妃に睨まれると渋々部屋から出て行った。

「ほんとにあの子ときたら、  
どうしてあんなふうに育ってしまったのかしら」

王妃は眉を寄せてボソリと呟く。

「そうですか？

私は姫様の性格好きですよ。

鼻持ちならない美人の我侭娘に育つより、  
よっぽど人間らしいと思います。

それにコリーシャ様の娘ですからね・・・」

エレンははっとして

言い掛けた言葉を飲み込むと、

「すみません王妃様、とんだご無礼を！」

顔を真っ赤にしてペコペコ頭を下げる。

「エレンに名前で呼ばれるなんて  
何年ぶりかしらね」

王妃は静かに笑い、

懐かしげにエレンを見詰めた。

「二人でいる時は

名前で呼んでくれていいのよ？」

王妃は優しく言ったが、

エレンはブンブンと首を振り、



「いいえ、はじめはシツカリつけなくては  
いけません王妃様！」

厳しく自分自身に言聞かせたようだ。

「・・・せつかくおもしろい事に  
なりそうだったのに！」

自国の歴史書を歌うように読み上げていた  
家庭教師の言葉など耳に入らないのか、  
白雪はボソリと呟いていた。

パーン！

その小さな呟きを聞き逃さなかった  
女教師カーラは、  
恐れ多くも姫君の頭に  
平手を振るい落とした。

「いたーい！」

白雪は恨みがましくカーラを見上げたが、  
カーラはキレイな金髪をかき上げ、

「またよそ事を考えていましたね！」

厳しい口調で白雪を睨み付ける。

カーラは今から三年ほど前、

白雪の家庭教師兼教育係として雇われた  
修道院出のエリート貴族である。

そのわりには、やはり実家より修道

院生活が長かったせいもあるのか、

どこか他の貴族にはない大らかさがあった。

おまけに修道院では何やら

怪しげな歴史の謎を解いていたらしいのだ。

しかし、とびきりの美人であり

身のこなしも気品を感じさせる態度も

上級者であった。

「歴史なんか、つまんない！」

白雪は手にした本を投げ出すと

窓の外に目を向けた。

室内で勉強するなんて

もつたいないほどの御天気である。

「駄目ですよ！」

まだ何も言わぬ白雪に

カーラはピシヤリと言いきると、  
部屋中の窓のカーテンを、  
ご丁寧にもすべて閉めきってしまったのだ。  
几帳面な正確らしい。

「えーん！ 意地悪ー！！」

白雪はジタバタ手足を振り回して訴えたが、  
その悲痛な叫びは届かず  
カーラは再び本を読み始めた。

何事もなかったように、たんたんと。

「今から百年ほど昔・・・」

「百年！」

話の途中で白雪は声を上げた。

「また何事ですか！」

カーラは柳眉を寄せたが、

「先生、北の山の麓に住んでいたって言う  
一族の話を知っていますか？」

白雪は歴史の授業とは  
全然関係のない話を持ち出した。

どうしても、

さっきの事が頭から離れないらしい。

「北の山の麓って．．．

変な語学文化を持っていた

マーク族の事ですか？」

カーラは何か思い出すように首を傾げると、  
瞳を爛々と輝かせている白雪に言った。

いまだかつて白雪姫が、

ここまで遊びごと以外に

関心を持った事があっただろうか？

カーラは意外そうに白雪を見て思ったが、  
その表情は、まさに水をえた魚のごとく、  
生き生きとしたものだったのだ。

「先生、知っているんですか！」

白雪は手を叩いて悲鳴じみた声を上げると、

「すぐ戻りまーす！」

カーラの返事も聞かずに物凄い勢いで  
部屋から飛び出して行ってしまった。

一人残されたカーラは

茫然と立ちすくんでいたが、

「まさか、はったりでは！ やられたー！！」

白雪に嵌められたことに気付いたのか、  
レースのハンカチを噛み締め、  
鬼女さながらの形相で叫んだ。

今すぐ追い掛け、

とっつかまえてきたい心境であったが、  
逃げ出した白雪を探すのは容易ではない。

そう今に始まった事ではなかったのだ。

「まったく今回は意外な逃げ口上を  
考えたものね。

まさか私が修道院で調べていた

一族の話を持ち出すとは・・・」

カーラは倒れるように椅子に座ると、

「私、そのうちクビだわ・・・」

ホーツと溜め息を着き、

ふと、この城に初めて来た時の事を思い出した。

「今日からお前の面倒を見てくれる先生だよ」

王様の言葉に、

白雪は大きな瞳をさらに見開き、  
この世のものとは思えないほどの  
愛らしい笑みを浮べて、

「はじめまして。」

よろしく願いますカーラ先生」

と、とてもお上品に言ったのだ。

白雪は今まで付き合ってきた

我侭娘達とは程遠い性格であったが、  
今日というこの日まで

違う意味でカーラを困らせてきたのだ。

「ああ、どこでどう間違ったのやら・・・」

カーラは、あの頃会った素直な白雪に  
逢いたくてたまらない心境だった。

しかし、かなわぬ願いである。

これは本当にクビを覚悟しなければならぬ  
時期がきたのかも知れない・・・。

「先生ー！」

潔く腹をくくったカーラの耳に  
信じられない声が届いた。

「え!？」

カーラは扉を蹴破るように入ってきた  
白雪を見詰め、

「何か忘れ物？」

何とも間抜けなセリフを口にした。

「なにを言っているの？」

さっきの続き。これよこれ!」

白雪はエレンが持ってきた

問題の本をテーブルに置くと、  
先程自分が書き写したノートを  
開いて見せた。

「ホントに先生が知っている

一族の事ですか？」

白雪は好奇心をむき出しにして  
カーラに詰め寄る。

「な、なぜこんな本が、ここに？」

カーラは著者を確認した。

ベラ・バトリー。

聞いたことのない著者名であったが、

どこか知った響きを持った名前ではあった。

どこでだろう・・・。

頭をひねったカーラに、

「変な文化を持った一族だったんでしょ？」

白雪が質問をする。

その白雪の言葉の為カーラは、  
今考えかけていた事をキレイさっぱり  
頭の中から除外してしまったようだ。

思い出せない名前の響きよりも、  
今、白雪姫がこんなに何かを  
一生懸命知ろうとしている！

信じられないが嬉しい事実  
に半ばカーラは陶醉していた。

カーラは本をめくると、  
自分が知っている一族の話 시작했다。

「このマーク族というのは、  
不老不死の魔法を持った  
一族だと言われていたの。  
でも滅んでしまったわ」

「土砂に埋もれたんでしょ？」



白雪は、先程ちらりと読んだ所を思い出し、  
カーラを見詰める。

「そう。でも最近その土砂の中から、  
遺留品や何かが発掘されているの。

かくいう私も、

昔はその発掘隊の手伝いをしていたのよ、  
修道院にいた時にね。

修道院は北の山に近い所に建っているから」

カーラはなつかしそうに目を細めた。

そういえば、ここ何年か発掘所に行っていないし、  
実家にも帰っていないな。

そんな思いが、フツと脳裏を過った。

「ふーん。でも不死だったんでしょ？

土砂に埋もれたって死なないんじゃないの？」

白雪はあまりにも単純な疑問を口にしたが、  
カーラは一瞬の躊躇もなく、

「嘘だったからでしょ」

キツパリ言い切った。

「……夢のないこと言わないでよ」

白雪は眉間に皺を寄せると本を見詰めて呟く。

「だいたい不老不死だなんて、  
そんな力を持っているのは  
悪魔か吸血鬼くらいですよ！」

カーラは嫌悪感をむき出しにして言う。

カーラはオカルトまがいの  
怪しげな話は信用しない性格なのだ。

かわって白雪はと言うと、  
読書家なのは先にのべた通りだが、  
その種類が少し問題だ。

ホラーや超状現象などといった話ばかり  
好んで読むのである。

カーラにとっては、  
その事も悩みの種の一つであった。

女の子が、しかも姫という立場の・・・  
そんな怪しげな話に興味を持つなんて！

しかし白雪にその思いが届くはずもなく、  
彼女は本を持って立ち上がった。

「先生これ読めるんでしょ？」

「ええ。昔取った杵柄ですわ」

カーラの答えに白雪はにんまりすると、

「じゃあ行きましょう」

本とノートを小脇に抱え、

カーラに背を向けた。

「行くって何処へ？

それより白雪姫、そんなもの、

いったい何処から持ってきたんですか？」

今にも駆け出しそうな勢いの白雪の背に

カーラは声を掛けた。

白雪はクルリと振り返ると、

「お母様の所よ」

ニツコリ笑って答える。

「お、母様って・・・王妃様!？」

カーラは目を丸くして白雪を見詰めた。

「私のお母様は王妃に決まっていますでしょ？」

もったもな事を白雪は速答すると、

「早く早く!」

開いた口がふさがらない状態の  
カーラの腕を掴み、強引に引っ張り始めた。

「ちよつと白雪姫！」

カーラは躊躇した。

何の用もなく王妃の部屋に行くことは  
禁止されているのだ。

またしてもカーラは、

自分のクビを心配する羽目になったのだ……。

「すみません王妃様！」

王妃の部屋に入るなりカーラは頭を下げた。

「いいえ。勉強の時間だと言うのに、

また白雪が無茶を言ったようで。

大変でしょう我儂な娘で」

王妃は優しく微笑むとカーラの手を取った。

「いいえ、とんでもありません。

ただもつ少し集中力があればよいのですけれど」

カーラは首を横に振った後、

鏡の前に駆け寄った白雪に目を向けた。

「あれが白雪姫の言っていた物ですか？」

カーラは視線を

白雪の前にある鏡に移して聞いた。

「先生あの文字が読めるんですって？」

王妃の脇に立っていたエレンが

祈るように指を組んでカーラの顔を覗き込む。

「ええ」

カーラは小さく頷くと白雪の隣に並んだ。

「さすが修道院出のエリートさんですね」

エレンは感心して呟くと、

「さ、王妃様も」

王妃の手を引いて二人の所まで歩いた。

「ね、先生どう？」

白雪は本を抱えていた手に力を入れた。

その瞳は少し潤んでいる。

ここで「やっぱり読めないわ」

なんて言ったら

白雪姫はどんな顔をするだろう。

などとカーラは意地の悪い事を考えたが  
王妃様のいる前で、  
そんなことは出来ない。

それは断念した。

「大丈夫です。

かなり古い物らしいですけど、  
文字はしっかり読めますよ」

カーラは鏡の下方に刻まれた文字を  
指でなぞった。

そこにはこう書かれていた。

「鏡よ鏡よ鏡さん。世界で一番・・・」

言い掛けてカーラは言葉を切った。

「世界で一番なに？」

白雪が先を促す。

カーラは白雪に視線を移すと、

「それだけです」

あっさりきっぱり言っただけだ。

「えー？」

拍子抜けしたように白雪は声を上げた。

もつとすごい事が書いてあるだろうと期待していたのに、  
なんともあっけない幕切れだ。

「何か意味でもあるんですか？」

エレンが眉をしかめてカーラを見る。

「さあ？」

「なんだか途中まで彫って、  
止めたって感じですね。  
だって見てください」

カーラは文字の語尾を指差し、

「ここに何か彫りかけた後があるでしょう？」

皆が見詰めた視線の先には、  
たしかに点と線の様な何か、  
中途半端に彫られた後がついていた。

「なーんだ。じゃあ、呪文にはならないのか」

白雪は残念そうに息を着くと、

つまらなそうに鏡を撫でた。

「せっかく地下で見付けた本も、  
けつきよく無駄だったって訳ですね」

エレンの落胆ぶりも、  
気の毒である。

王妃は白雪とエレンを見ると、

「そんなに気を落とさなくても。  
楽しかったじゃない。

一時の事だったけど。  
ねえ、先生」

二人を慰めるように言った。

「さあ白雪姫。お勉強を再開しましょう」

カーラは所在なさげに頷くと、  
溜め息をつき続ける白雪の手を取り、  
その場を立ち去ろうとした。

王妃の部屋に無断で入っているところを  
他の者に見られたら大変である。

一刻も早くこの場を立ち去らねばならない。

「それでは失礼します」



白雪の手を引いて  
カーラが扉の把手に手を掛けた時、

どんどんどん！

扉が叩かれた。

カーラはドキリとした。

これはもうクビだ、  
クビしかない！  
泣きそうな顔で頭を抱える。

そんなカーラの考えなど、  
部屋の中にいる他の達には、  
ちっとも分かっていないようだ。

「どうしたんですか？」

事も無げにエレンが扉を開く。

ああ、もうおしまいだー！  
カーラは目の前に、真っ黒な緞帳が  
落ちてきたのを見た気がした。

そして、その緞帳の外側を  
一人の人影が走り通っていく。

「失礼ですけど、

ここにカーラ先生が来ていませんか？」

その声に、カーラの人生の綴帳が  
するすると上がった。

この声は調理場のアーシャ！

この子なら今のこの状況を

黙っていてくれるに違いない！

「ああ、カーラ先生！」

アーシャは戸口の影で

蒼白な顔をしているカーラを見付け駆け寄った。

「今連絡が入ったんですが、

マーク族の遺留品発掘隊の人たちが、

土砂にあつて怪我をしたらしいんです。

たいした被害はなかったようですが

指揮官が足に大怪我をして、

もう発掘の指揮が取れないそうなんです。

それでしばらく代わりに

カーラ先生に来てほしいって」

アーシャは一気にまくしたてると、

不安そうにカーラを見詰めた。

彼女はカーラと同じ国の出身者であり、

そして、発掘隊の指揮官をしている男、

バーミリオンの孫娘であった。

「発掘ってマーク族の？」

白雪は、さっきとは違う意味で  
蒼白な顔をしているカーラを見上げた。

「行ってあげたらどう？」

王妃が頬に手をあてて呟いた。

「え？」

カーラが意外そうな声を上げると、

「ずっと、という訳にはいかないでしょうけど、  
その指揮官さんの足が良くなるまででも、  
王には私から話しておきますから」

王妃はそういつと部屋から出ていった。

「あ、そうそう」

出て行きぎわ王妃は声を上げると  
白雪を見詰め、

「あまり先生を脅すような事を  
言っんじゃないありませんよ」

叱り付けるようにいい、  
クスリと笑ってカーラを見た。

カーラが訳も判らず黙っていると、

「姫様に、あることないこと

吹き込まれているんでしょうけど、

特別王様の断りがなく王妃様の部屋に入っても、

お咎めは受けないんですよ」

エレンが耳打ちした。

「白雪姫〜！」

カーラは声を震わせて白雪に視線を走らせた。

が、逃げ足は速いもの。

とっくにその場から姿をくらましていた

「大変ですね、先生も」

エレンは気の毒そうに呟くと、

「荷造りのお手伝いをしますわ。

さ、リーシャも」

にこつと笑って、カーラの前を歩きだした。

「リーシャ、知ってた？」

「はい？」

ボソリと呟くカーラにリーシャが聞き返す。

「私用で王妃様の部屋に入ると、  
クビになるんですって」

カーラは拳を握り締めて呟いた。

「冗談でしょ？」

リーシャは可笑しそうに答えると、  
エレンの後に続いた。

「私だけが白雪姫の作り話に  
騙されていたのね！」

今更ながらカーラは自分の素直さを呪っていた。



## 陰謀

「鏡よ鏡よ鏡さん、

世界で一番・・・

一番何かしらね、お母様？」

カーラが城を出てから、

白雪は鏡の前で同じ言葉ばかり呟いていた。

「さあ、鏡なのだから・・・

一番美しいのは誰？　じゃないかしら」

天蓋付きの立派なベッドに腰掛けて、

王妃は深刻ぶった表情の白雪に言った。

もちろん王妃は冗談で言った事なのだが、

白雪は、今は何であれ言ってみるに限る！  
の考えに取り付かれていた。

しかし一番妥当そうな言葉であるのに、

白雪には思いつかなかった言葉だ。

やっぱり普通の女の子とは、

何処かしら考えがズレているらしい。

「それ、それいいわよお母様。

やっぱり鏡には美しさを聞くものよね。

ちよっとナルシスト的だけど、

鏡はナルシストの必須アイテムだろうし！」

白雪は鏡の前に立ち、

「鏡よ鏡よ鏡さん世界で一番美しいのは、  
だ・あ・れ・？」

可愛くシナをつくって叫んだ。

が、結果は今までと同じ。

鏡はウンともスンとも言わない。

「ちえー！ やっぱり何にも起こらない」

白雪は地団太を踏みながら鏡を睨んだが、  
鏡には膨れっ面の自分の顔しか映っていない。

「もう諦めなさい。ただの鏡よ」

王妃は白雪の肩を叩いて慰めたが、

「うっうー！」

こんなことなら、

強引にカーラ先生に

付いて行けばよかったー！」

どれほど白雪が悔しがっても後の祭りである。

もともと、

そう簡単に王が白雪を城から出すはずは



ないのだが・・・。

「先生が帰ってきたら、  
向こうでの話を聞けばいいでしょ」

王妃がくすくす笑うと、

「はー、つまんないつまんない！」

白雪はひどく落胆した様子で部屋から出ていった。

入れ違いにエレンが入ってくる。

「なんだか元気ありませんね姫様」

扉を後ろ手に閉めエレンは王妃を見た。

王妃は鏡の前に立ち、その表面を撫でている。

「どうかしましたか？」

エレンは首を傾げたが王妃は軽く首を振り、

「何でもないわ。何だか疲れちゃって」

ホウツと息をつく。

「それでは少し休まれたほうが」

「そうするわ」

エレンの手をかりて王妃はベッドに横になった。

「しばらく他の者が

来ないようにはしておきます」

エレンはペコリと頭を下げると、  
部屋から出ていった。

王妃は目を閉じた。

なぜだか頭が重いのだ。

痛いとかそういう感じではなく、  
何か重たい鉄の固まりの様な物が  
頭の中に入り込んできた。

そんな感じだ。

「どうしたのかしら．．．」

王妃は頭を振りながら  
何気なく鏡の方に目をやり、ギョツとした。

あんなにキレイで  
艶やかな表面をもっていた鏡が、  
ススでも被ったように  
真っ黒になっていたのだ。

「何．．．?」

王妃は鏡の前まで歩き、  
その表面に手を伸ばした。

その時、固いガラスであるはずの鏡面が  
水飴の様に伸び上がり王妃の手に巻き付いた。

いや、掴まれたと言っていいだろう。

それは人の手の形をしていたのだ。

「な、何!？」

鏡に掴まれた手を王妃は振り切ろうとしたが、  
やわらかそうな見た目に反し、  
それはガラス本来の固さを持っていて  
引き離すことが出来なかった。

『ついに言ったね呪いの言葉を。』

『叶えてやろう、お前の望みを』

鏡が鈍い光を発し気味の悪い言葉を言う。

いや言っているのではない。

鏡が話す訳がないのだから。

言葉は王妃の手から頭に向かって  
響いてくるようなのだ。

さつき感じた頭の重みが、  
その音声ではない言葉を  
聞いているような気がする。

「何、何なの？」

王妃はあいている左手で鏡を叩いたが、  
自分が痛い思いをするだけだった。

そう、鏡を叩くと自分の頭が痛くなったのだ。

頭のなかにある重たい何かが、頭痛を引き起こす。

王妃は真つ青な顔で大声を上げたが、  
誰も王妃の悲鳴には気付かなかった。

いくらエレンが人ばらいをしたため  
近くに人がいないと言っても、  
護衛の兵士は扉の外に控えているはずだ。

その彼らにも王妃の声は届かない。

『叶えてやろう、お前の望みを。』

お前の光を奪って、  
どんどん美しく成長するあの白雪を、  
お前のものにしてあげるよ。』

「どづいつことです」

王妃は目をむいた。

『白雪の、あの美しい体を、  
お前にやろうと言っているんだよ』

何の感情も感じさせぬ声が  
王妃の頭の中で響いた。

「何をバカな事を言っているの。私がいっ！」

王妃は鏡を睨み付けた。

『お前が良くても、私は欲しいんだよ。  
あの若くて美しい白雪の体が！』

鏡の面が黒から真っ赤に変わったとき、  
その歪んだ面に女の顔が映った。

美しい女の顔は見る見るうちに年老い醜くなり、  
仕舞には骸骨になった。

王妃は一気に頭から血が落ちるのを感じた。

『ふふふふ。舞台の幕は上がったね』

王妃の薄れていく意識のなかで、  
不気味な女の笑い声は高く長く木霊した。

闇が続いていた。

何処までも何処までも、  
深く暗い闇が。

「夢を見ているのかしら」

自分の足元さえも、  
はっきりと見えぬ暗がりの中で王妃は考えた。

もう何時間も同じ所を歩き回っている気がする。

「ここはどこ？」

王妃の言葉に答えるように、  
ポウツとした光が前方に浮かび上がった。

遠近感のまったく感じられない世界。  
光の所まではかなり距離がありそうだったが、  
意外にも早く、そこまで辿り着くことが出来た。

そっと、その中を覗き込む。

見覚えのある部屋だ。

花柄の壁紙に淡い薄桃色のカーテン。

そして立派な天蓋付きのベッドには  
美しい娘が眠っていた。

「白雪！」

王妃は手を伸ばしたが、  
ここから外に出る事は出来なかった。

「ここはどこ、」

私は何処から白雪を見ているの？」

王妃は辺りを見回した。

どこまでも続く闇の壁は消えていた。

そこかしこに、光の窓のようなものが浮んでいる。

それにはどれも、城内のどこかが映っているのだ。

王妃は再び白雪の部屋に目を移した。

「窓が見えるこの位置は壁のはず。

そこには確か鏡が・・・」

王妃はハツとして、

ここより奥に見える光の窓に駆け寄った。

そこからも白雪の部屋が見えた。

しかしさっきと視点が違う。

鏡が掛けられている壁が見えたのだ。

「なんてこと。ここは鏡の・・・」

物を映すものの裏側なんだわ！」

王妃は自分の目の前で、  
ひらひら揺れる薄桃色のカーテンを見詰めて叫んだ。

ここは白雪の部屋の窓ガラスの裏だ。

「どうして、悪い夢でも見ているの？」

王妃はカー杯窓ガラスを叩いた。

しかし、向こう側にいる人間には、  
風が窓ガラスを叩いているとしか思えないだろう。

どうにかしてここから出られないものか・・・

王妃は辺りを見回したが何処の光の窓も、  
このこと同じように固く閉ざされている。

「まさか、あれは夢ではなかったのでは」

王妃は昼間見た不吉な夢を思い出した。

あれは夢だったではないか。

エレンが私を起こしにきた時、  
私はちゃんとベッドで眠っていた。

鏡には何の変化もなく・・・。



王妃が混乱していると  
白雪の部屋のドアが開いた。

ノックもなしに突然に．．．。

王妃は侵入者の顔を見て驚愕した。

自分なのだ。

今部屋に入ってきたのは  
自分と同じ顔をした誰か．．．。

「そんな！」

王妃は窓ガラスを叩いた。

その音に気が付いたのか、  
ガラスの向こうの誰かは、  
ゆっくり顔を上げ王妃に笑い掛けた。

『もうすぐだよ、待っておいで』

あの声が、夢だと思っていたあの声が、  
再び王妃の頭のなかに響いた。

偽王妃は安らかな吐息を立てて眠っている  
白雪に近付くと、  
その枕元に腰掛けニヤリと笑った。

真っ赤なルージュをひいた唇の端から

尖った牙がのぞく。

『くくく。』

かれこれ一〇〇年ぶりのご馳走かねえ』

白雪の体を抱き起こし

その細く白い首に口づける。

「やめて！」

王妃は狂ったように窓ガラスを叩いたが、  
偽王妃は顔を上げ、

『お前が望んだことだろう？』

歪んだ笑い顔で呟いた。

「嘘よ。私はそんなこと望んでいない。  
あなたが勝手に・・・」

『ふふふ。口でどう言おうと、』

お前は考えていた、思っていた。

白雪の美しさが、若さが嫉ましいと』

「そんな・・・」

王妃は口をつぐんだ。

確かにそんなことを感じたこともある。

しかし、憎いとか、  
殺してやりたいなどと思った事は一度だってない。

『お前のその心が、私を蘇らせた。』

あの呪いの言葉と共に．．．』

「世界で一番美しいのは誰？」

『お前にしてやるよ』

「でも、あれを言ったのは私ではないわ」

王妃は唇を噛み締めた。

あんな言葉思いつくんじゃなかったと  
今更後悔しても遅い。

『そんなこと。』

誰が言ったかなんて問題じゃないよ。

その場にいたものの、気持ちの責任さ』

偽王妃は青い瞳を

血のように真っ赤にして笑うと、

白雪の首に噛み付いた。

尖った二つの牙は、

蠟のように白い首に深く沈み込んだ。

「あなたは．．．バンパイア．．．？」

王妃はその場に膝をつき呟いた。

『そう呼ぶ者もいたね。』

私は不老不死の力を手に入れたマーク族の女王、

ベラ・バトリー。

欲しいのは、若く美しい体さ。

いつの時代でもね』

## 不安

馬車を二日とばして実家に帰ったカーラは、家の者との再会もそこに病院へ向かった。

カーラの実家があるこの町も、一応白雪の父親である王が統治している町であるが、城から一番離れているせいか見るからに田舎である。

しかし、国内に修道院があるのはここだけなので、人口は多く、病院や学校などの医療、教育設備は万全であった。

その万全な病院にカーラがおもむくと呼び出しをするまでもなく、待合室に発掘隊指揮官バーミリオンの姿があった。

「先生！」

カーラは懐かしさに頬を緩めるとバーミリオンの手を取った。

「災難でしたわね」

待合室の椅子に

バーミリオンと並んで座ったカーラは気の毒そうに彼の足を見た。

石膏で固められた右足は  
包帯でぐるぐる巻きにされている。

「いや、みつもない話だ。私は仲間のおかげで  
たいした怪我をせずにすんだが、  
もう発掘を進められるほどの人数もおらん。  
一カ月は皆、絶対安静じゃと。  
せつかくカーラに来てもらっても、  
君一人では無理な話だな」

バーミリオンは大きく息をつき、  
白い立派な髭を撫でる。

「そうなんですか？  
せつかく急いで来たのに。  
残念だわ」

カーラは肩を落としたが、

「しかし、君が発掘隊から抜けてから、  
面白いものが見つかったんだよ」

バーミリオンは愉しそうに言った。

「面白いもの？  
私がいいた頃は、  
家の瓦礫ばかりでしたけど」

カーラは懐かしそうに

窓から見える大きな山に目を向けた。

その山の麓にマーク族が住んでいた町の跡があるのだ。

「修道院を出るまでという約束で

君を発掘隊のメンバーに入れたが、その頃はつまらない物ばかりしか掘り起こせなかったな。

あれが掘り出されたのは、

君が修道院を出て家庭教師の職についてから数か月ほどたった頃の事だ」

バーミリオンは腕を組んで頷いた。

「何が見つかったんですか？」

カーラは身を乗り出した。

もういい歳なのだが、

やはり興味を魅かれるものに対してはいつまでも子供のような好奇心でいられるのだ。

「鏡じゃよ」

「鏡？」

「そう。かなりの数が見つかったんだが、土砂のためだろう、どれも割れていてね。しかし一つだけあったんだ。」

キレイな鏡がね」

「それは今どこに？」

カーラは何か考え深げに、  
眉根を寄せている  
バーミリオンを促した。

バーミリオンは真っ白くなった眉を寄せ、  
細い目でカーラを見据えると、

「盗まれてしまった」

大きな溜め息の様な声で呟いた。

暗い森の夜道を、

一台の馬車が物凄い勢いで走っていた。

その馬車には一人の女が乗ってた。

カーラである。

彼女は今日病院で会ったバーミリオンの話を、  
頭の中で思い返していた。

「おかしい話なんだが、  
たくさんあった発掘品の中で、



その鏡だけが盗まれてしまったんだ。  
だが、私は盗まれたとは思えないんじゃないよ。  
まるで消えたような気がしてならない……」

まさか、あの鏡が……。

カーラは首を振った。

物が消えるなんて、

そんな非現実的な事があるだろうか？

盗まれた鏡が王妃の手元に渡ったのか、  
それとも本当に鏡が消えて……。

「そんな馬鹿なこと」

カーラは自分の考えに思わず吹き出した。

鏡が自分の意志で王妃のもとに向かったなんて。

足があるわけでもないのに。

鏡が無くなったのは、王妃が白雪姫を産んだ年。

そして、ほぼ同時期、誰かが祝いとして  
王妃に贈ってきたという、あの鏡……。

偶然だろうか？

「何だか訳が判らないけれど、  
とにかく王妃様からあの鏡を借りて来て、  
指揮官に見せればすむことだわ」

そう、それだけでいいのだ。

手紙ですむことなのに、  
カーラは馬車に飛び乗っていた。

何か不吉なことが起こりそうな気がした。

重たく黒い雲が、胸の奥で渦巻いているようだ。

「隣の町で馬をかえれば、  
明日の夕方には城に着くはず・・・」

ガターン！

カーラの不安な心をかき乱すように、  
突然、馬車が大きく揺れ止まった。

「どうかしたの？」

馬車からおりて御者に問うより早く、  
カーラはその原因を知った。

「なに？」

馬車に下げられたランプの灯に照らされ、

闇の中に見えたものは、  
道を阻むように広がっている、  
土砂と灌木の群れである。

「どうして、雨が降ったわけでもないのに・・・」

「この辺は地盤が緩いんですよ。  
どうします？」

土砂を退かさないと先には進めませんよ」

御者は土砂の周りを、  
うろつろと歩き回っているカーラに聞いた。

土砂は道を阻んではいたが、  
その先までには及んでいない。

鬱蒼と繁る雑木林に、  
腰まで掛かるほどの伸びた草。

その中に行くことは可能だ。

「馬を一頭借りてもいいかしら？」

カーラは二頭つなげたうちの  
一頭の馬を馬車からはずすと、  
それにまたがった。

「森の中を行くんですか？」

御者が目を丸くする。

「急いでいるのよ。  
荷物は後で届けてちょうだい」

カーラは道を外れ森の中に入って行った。

「お嬢様だと聞いてたけど・・・」

御者は見てはいけないものを見ってしまった気がして、  
早々にその場を退散した。

王妃の部屋の掃除をすませたエレンは、  
暗い人影を城の回廊で見付けギョツとした。

「姫様、こんなところで  
何をしているんですか？」

不気味な人影の正体は白雪だった。

青白い顔で、開け放した窓から見える  
森の景色を眺めていたのだ。

いや眺めている、  
というのは間違いかもしれない。

エレンの目には、ただボーツと

しているようにしか見えなかったからだ。

白雪の海色の瞳は何も映さない  
死んだ魚の目の様に思えた。

エレンの声に気付いた白雪は、  
重そうに体を反転させて眠そうな顔で笑った・・・  
のだろう。

笑顔をつくっているようなのだが、  
何だか泣きだす一歩手前の表情みたいだ。

「どこか具合でも悪いんですか、姫様？」

エレンは白雪の額に手をあてた。

熱を感じるどころか、  
ヒヤリと冷気を帯びている。

春先とはいえ石造りの城内はかなり冷える。

しかも廊下は室内とは比べものにならないほど  
温度が低いのだ。

そんなに長いこと、  
ここにいたのだろうか？

「少しお休みになられたほうがいいですよ。  
さ、お部屋に行きましょう」

エレンは白雪の手を取ったが、  
白雪はその手を振りはらい、

「お母様が変なの」

蚊が鳴くほどの小声でボソリと呟いた。

「え、何ですか？」

白雪の言葉が良く聞き取れなかったエレンは、  
彼女の顔を覗き込んで聞き返した。

白く広い額に、うつすらと汗をにじませている  
白雪は、なんだかとても辛そうに見えた。

「お母様、変じゃない？」

白雪はエレンを見上げた。

「変 と言つと？」

エレンが聞き返すと、

白雪はガラスに映る自分の姿を見て首を振り、  
きびすを返して走りだした。

「姫様！」

エレンは慌てて後を追ったが、

白雪は振り返りもせず

自分の部屋に駆け込んでしまった。

「姫様？」

エレンは中の様子をつかがうように、戸口に耳をあてた。

グズグズと噉り泣く声がある。

「姫様！」

エレンは礼儀も忘れて、おもいきり扉を開いた。

室内のカーテンは締め切られており、薄暗く少し肌寒かった。

「どうしてカーテンを閉めてるんですか？外はとても良いお天気ですよ」

エレンは窓辺にあゆみ寄り、カーテンに手を掛けたが、飛び付くように駆け寄ってきた白雪の手に邪魔されてしまった。

「だめよ。カーテンを開けちゃ！」

白雪は窓を背にして立ち、エレンがカーテンを開けられないように阻んだ。

「どうしてですか？」

お天気の日は、お好きでしょう。  
それとも王様がたくさん連れてきた馬を  
見るのが嫌なのですか？」

王は今朝、国中の厩の馬を集め、  
城の庭に放していた。

健康診断等と理由は立派だったが、  
なぜ突然こんな事を思いついたのか  
誰にも見当がつかなかった。

ただ、昨夜王妃が王の部屋に行つて、  
何やら話し込んでいたと言う話は、  
小間使いの一人から聞いてはいたが。

エレンは何の返答もしない白雪を見詰め、  
先程の話を蒸し返した。

「王妃様の何が変だと言うんですか？」

白雪の手を取り、  
宥めるような柔らかい口調で聞いたが、  
白雪は唇を噛み締め何か物言いたげな表情で  
エレンを見上げた。

しかし、ふいつと背を向けてしまう。

エレンは困ったように首を振ると、

「私は王妃様が床につく前に、



いつもベッドメイキングに行きます。  
その時、王妃様を見て、  
おかしいと思ったことがあるんです」

「おかしいって？」

白雪は眉根を寄せた。

「櫛で髪をとく手が逆なんですよ。

王妃様は右利きなのに左手で。

それだけなら、

さほど気になる事ではないのだけれど、

夜にお茶を届けた時、

左手でカップを受け取って左手でお茶を飲み、

左手でフォークを持って

果物を召し上がったんですよ。

どう思います？」

エレンはいつになく深刻な口調で

白雪に聞いた。

白雪はしばらく何か考え深げに

顔をしかめていたが、

「お母様は右利きよ。

今朝部屋に行ったとき、

右手で何か書いていたわ」

思い出したように声をあげた。

「ですよ、そんなですよ。  
昼間は右利きなんですよ」

エレンが渋い顔で呟く。

「それにお母様冷たいの。」

もう部屋には来るなって。

私の顔を見たくないって言ったわ。

でもそれは昼だけ。

夜はまるで人が変わったようにやさしいの。

エレンの話の話を聞くと、

夜のお母様の方が別人のようだけど、

私にとっては昼の方が違う人みたいよ」

白雪は今にも泣きだしそうな顔で話した。

エレンは両腕を組み頭をひねった。

別人だと感じるのは気のせいだとしても  
左利きが府に落ちない・・・。

「王妃様が冷たくなったと感じたのは  
いつごろからですか？」

「カーラ先生が実家に帰った翌日からよ」

エレンの質問に白雪は速答した。

その答えは、エレンが王妃に対して  
違和感を感じ始めた時期と同じだった。

「カーラ先生が帰ってから、何かあったのかしら？」

白雪は心配そうに呟く。

「何かあって何ですか？」

「悪い魔法使いに呪いを掛けられてるとか・・・」

「・・・姫様は変な本の読みすぎです。

そんなことが、あるわけないでしょう」

エレンは大仰に肩をすくめて見せると、

「とにかく王妃様が姫様に冷たくするのは何か考えあつての事でしょうから、めそめそするんじゃないやありません！」

白雪の肩を叩いて言う。

しかし白雪はエレンを見上げ、

「じゃあ、左利きになってしまったのは、どう説明するって言うのよ!」

責めるように声を荒げる。

エレンが黙り込んでしまうと、

「やっぱり悪い魔女が・・・」

「姫様!!」

白雪が呟き掛けた言葉を

エレンは素早く阻止した。

「ならエレンが、

お母様の左利きに気付いたのはいつ？」

自分の考えを頭ごなしに否定されて、

機嫌をそこねた白雪はエレンを睨み上げた。

エレンは頭を抱えて考え込むと、

ソロリと視線を白雪に向け、

「姫様の思う時期と同じです・・・」

蚊の鳴くほどに小さな声で呟いた。

「ほら、やっぱり

白雪は勝ち誇ったように細い腰に手をあて、

仁王立ちになった。

エレンは白雪の態度を見て、

何となくホツとした。

やっといつもの姫様らしくなってきた。

しかし血色の悪さは変わらない。

「やっぱり何かあったのよ。  
それに、部屋のカーテンを  
締め切っておきなさいって言ったのは  
お母様なのよ。」

何か外にあるのかもしれないじゃない！」

白雪はチラリとカーテンの方に目を向けた。

「何かって言われても、そんなの憶測ですし……  
そんなことより姫様、  
ちゃんと食事なさっていますか？  
顔色が病人のように真っ青ですけど」

「えー!？」

心配顔のエレンの言葉に、

白雪は意外そうな顔で叫んだ。

「嘘でしょ、そりゃ、お母様に冷たくされて  
イジケてはいたけど、  
ご飯は毎日しっかり食べているわよ！」

白雪は自分の顔をぺたぺた撫で回したが、  
そんなことをしたって  
自分の顔色は見えやしないし、  
ましてや血色が良くなるはずもない。

「鏡で見てくださいなさい」

エレンは壁に掛けてある鏡に目を向け  
眉を寄せた。

「何かのおまじまいですか？」

鏡には大きめのスカーフが  
掛けられていたのだ。

「それも、お母様がしなさいって言ったの。  
とにかくカーラ先生が戻るまで、  
なるべく姿を映す物の前には立つなって」

白雪は若草色のスカーフが掛けられた  
鏡の縁を撫でながら目を伏せた。

## 陰謀2

「馬がない？」

森の中を四苦八苦して抜けてきたカーラに、  
厩の主人は冷たく言った。

「どうして？」

カーラはガランとした馬小屋を見回し、  
眉をしかめる。

町や村には必ず厩がある。

そこは町や村同士を繋ぐ大切な場所だ。

急ぎの時は厩で馬を借り、  
先々の町の厩で馬を代えながら進む。

そうすれば、  
いつでも疲れていない馬で走る事が出来る。

馬はこの時代の最高交通手段であった。

その馬が厩にいない。しかも一頭も！

「どうして、」

「これじゃ商売にならないでしょうー！」

カーラは厩の主人に怒鳴りつけたが、  
主人は顔色一つ変えずに、

「仕方ないでしょ、王様からのご命令だ。

厩の馬は健康診断を受けましょうってね」

あっさりきっぱり言い切った。

「だからって、なんで全部・・・」

「だから王様が

全馬いっぺんにすませろと言っんですよ」

不満顔でなおも食い下がるカーラに、  
主人が口を挟む。

「・・・いつ言われたのよ」

観念したようにカーラは大きく息をついた。

「今朝です。城から獣医がやってきて、

根こそぎ厩の馬を連れて行きましたよ」

何となく投げ遣りな口調で主人は言った。

なんだか落ちついてよく顔を見てみると、  
主人の顔はむくれている。

態度がつっけんどんなものも、  
ひよっとしたら



機嫌が悪いからなのかもしれない。

そして、その機嫌の悪さが何処から来ているのか、落ち着きを取り戻したカーラには分かっていた。

主人も困っていたのだ。

突然商売道具を連れていかれて。

「王様の命令じゃ、嫌だつて言えないものね」

カーラは気の毒そうに主人を見た。

主人は腕を組んで、

眉間に深く皺を寄せていたが、フウツと大きく息を着き、

「あんたが乗ってきた馬は、もうへとへとだよ。

急いでるとこ悪いけど、

やっぱり今日はこの村で休んだほうがいい」

馬の手綱を取って馬小屋に入った。

「ああもう！ 急いでいるのに！！」

主人の後に続いて馬小屋に入ったカーラは無駄とは知りつつも、

口にはいられない言葉を呟いた。

その不満げな表情を嘲笑うかの様に、

けたたましい馬声が馬小屋いっばいに響いた。

突然の声にカーラは

鼓膜が破れたのではないかと思ったが、

耳はキンキンするだけで、

ちゃんと聴力は働いているようだ。

「ななななによ！ いるんじゃない一頭！！」

カーラは耳を塞いで、

なおも叫び続ける馬のいななきに負けないくらい、  
大きな声を張り上げた。

「それは駄目ですよ。個人の馬だ」

主人はカーラが乗ってきた馬を

奥の小屋に繋ぐと、手早く手入れにかかった。

「あんたは二階の宿屋で休むんだな」

主人は振り返りもせずと言うと、

後は馬に向いたまま黙々と作業を続け、

ほんのちよびつとも

カーラに気をかける事はなかった。

人間の客よりも馬の方が好きらしい。

こんな美女をほったらかしかい！

虚しく心の中で叫んでみたが、

その叫びに答えたのは、  
またしても喧しい馬鹿馬の悲鳴だった。

「喧しいわよ！」

美形の王子様でも乗せて走ったら、  
さぞ様になるであろうほどに立派な白馬であったが、  
どこか間抜けっぽい面をしたその馬の鼻っ面を、  
カーラはピシヤリと叩いた。

その馬が本当に王子様の持ち馬だと知らされたのは、  
カーラが宿屋の食堂で、  
筋だらけの細切れ牛肉ビーフシチューと  
格闘している時であった。

「お願い、もうやめて・・・」

王妃は白雪の部屋の鏡の中で膝をついた。

鏡の向こうでは、あの悪魔が娘の血を吸っている。

偽王妃は顔を上げると、

真っ赤に染まった唇でニヤリと笑った。

『色々手を打っているようだが無駄だよ。

あの女教師は戻って来ないさ。

なんせ既に一頭も馬がないんじゃないかねえ。

それにやっとの思いでここに戻って来ても、

もう遅い。白雪は私の物さ。  
ほほほほほほ！』

王妃は唇を噛み締めた。

白雪をこのまま城に置いておくわけにはいかない。

なんとかして城から出さなければ。

かといって王に話したところで  
何の解決にもなりはしない。

王はもう偽王妃のいいなりだ。

「ああ、先生あなたを実家に帰したのは  
間違いでした。

すべてあの悪魔の仕業だったなんて．．．」

王妃は白雪から血を吸い続ける悪魔から  
視線をそらし顔を覆った。

後はエレンに賭けるしかない．．．。

王妃は心の奥底で、祈るように呟いた。

さて王妃の祈りが届いたのかどうかは知らないが、

エレンは紅茶を持って王妃の部屋に出向いていた。

王妃の姿はなかった。

「どうしてー？ 十二時頃にお茶を持ってきてくれって言ったのは王妃様じゃない！」

エレンはブーたれて、  
窓際にある机の上にティーセットを置いた。

「どこに行ったのかしら？」

机に寄り掛かり呟いた時、

エレンはふと昼間、

白雪が話していた事を思い出した。

「今朝、右手で何か書いていたわ」

エレンはなにげなく、

机の引き出し裏に手を伸ばした。

王妃が城に嫁いで来たばかりの頃、  
王は今ほど寛大な人物ではなく、  
王妃が下の者と口をきく事さえ  
良く思っていなかった。

特にエレンは

王妃にとって特別な存在である。

それがどうでもいい嫉妬でしかなかったと  
王自身が気付くまで、

王妃はエレンと口をきけなかったのである。

そのため、エレンは今でも王妃に対して  
友達のような態度を取らぬ様、  
気を付けているのだ。

その頃、王妃とエレンの会話は  
手紙を通して行なわれていた。

そのポストの役目を果たしていたのが  
机の引き出しの裏である。

白雪が話した

「何かを書いていた」という言葉が思い出されて、  
何となく伸ばした手だったが、  
その指先には懐かしい手応えが返ってきた。

「手紙が・・・」

エレンは引き出しの裏に  
軽く糊付けされていた手紙を剥がすと、  
白い封筒に書かれている文字に目を走らせた。

『この手紙を見付けたら、  
すぐに自分の部屋に戻って、  
そこで封を開けて』と書いてある。

エレンはその言葉通り、  
すぐに王妃の部屋から外に出た。

## 王子

「ほらあの人、隣国の王子様らしいよ。  
遠乗りに出てきて道に迷ったらしい」

ビーフシチューの安い筋肉を  
根気よく噛み締めていたカーラに、  
厩の女将が言う。

馬の世話は主人、人間の世話は女将。  
と仕事分けされているらしい。

女将は主人と違い  
人のよさそうな笑顔を難なく作る。

「王子様？ 馬小屋にいたあの白馬、  
王子様のものだったの？」

カーラは意外そうに呟いたが、  
間抜け面のあの馬でも、  
この王子を乗せれば様になるだろうと思った。

王子はカーラに負けぬ程の長く美しい金髪と、  
白い肌の持ち主だった。

窓際のテーブルで、お上品に  
ナイフとフォークを使って食事をしている。

一見、お玉の様に見える大きいスプーンで、



ビーフシチューをすすっているカーラとは雲泥の差である。

「なんだか随分待遇が違うみたいね、女将さん」

カーラは上等のステーキを

銀のフォークで口に運ぶ王子の姿を見て言った。

女将はカーラの差し出したグラスにワインを注ぐと、

「そりゃあ。お客さんとはギャラが違いますから」

左の指で丸を作って微笑む。

「はあ、財布をカバンに入れっぱなしなんて、私も間抜けよね。」

身分証明書持ってたから付けが出来たけど」

カーラは情けなさそうに肩をすくめて見せた。

「請求書はお城の方に送ればいいんですよね？」

女将は確認するように聞くと、

カーラの返答をまいった。

カーラはワインを味わいながら頷く。

女将は分かりましたと眩くと、

ワインの残量を確認するように軽く振り、

王子の方へ歩いていった。

「ああ！ おかわりは一度だけ〜?!」

カーラはワイングラスを振り上げて  
女将に声を掛けたが、女将の関心はすでに  
美しい青年へと向けられていた。

「さあ、王子様、家で一番上等なワインを、  
もう一杯いかが？」

女将は少女の様に目をパチパチさせながら  
王子を見詰め、嬉しそうに微笑んだ。

「歳考えなさいよ」

カーラの小さな嫌味は、会話の弾んでいる  
女将と王子の耳には入らなかつたらしい。

女将と王子の会話を、  
どこか遠くの方で聞きながら、  
カーラは鏡の事を考えていた。

あの鏡の出所と呪文めいた言葉の続きは何なのか。

王妃の鏡をバーミليونに見せれば、  
すべてが解決するように思えるのだが、  
なぜか事がうまく運ばない。

土砂崩れに馬の健康診断。

予想外の事が続いた。

そんな嬉しくもない偶然が、  
カーラの気持ちをいっそう不安にする。

こんなところで、

ご飯なんか食べてる場合じゃないのに！

カーラがグラスに入っているワインを  
一気に飲み干し立ち上がった時、  
ガターン！ と激しい音が室内に響いた。

あまりの音に、下の馬小屋にいる二頭の馬が  
悲鳴じみた声を上げる。

「ななな、なに？」

カーラは音のしたほうの見て目を丸くした。

騒音の犯人は王子だったのだ。

女将に進められたワインを断り切れずに、  
ぐいぐいやったのだらう。

真っ赤な顔をして椅子からずり落ちていた。

すでに安らかな吐息を立てていたが、  
明日の朝、目が覚めたら  
覚えもなく体中に痛みを感じる事だらう。

あれだけ豪快に倒れたのだから。

「ちょっと女将さん、バレたら捕まるわよ。  
隣の国の王様に」

倒れた王子の体を、  
わりとお気軽に起こしあげた女将に  
カーラは呆れ顔で言った。

「まさかこれくらいでブツ倒れるとは」

女将は意外そうに呟いた。

「育ちが違うのよ」

カーラは棘を含んだ口調で言い返す。

女将は泣きそうな顔でカーラを見た。

幸か不幸か、  
ここにはブツ倒れた王子と女将を含めて  
三人しか人がいない。

唯一の目撃者カーラが  
黙っていれば今晚の事を知る者はいない。  
女将は無言の訴えでカーラを見詰める。

もちろんカーラには、  
告げ口してやるうなんて考えは毛頭なかったが、

今回の食事と一泊代は只と言う女将の提案に文句はなかった。

「とにかくベッドに運ぶことね」

カーラの言葉を待つことなく、

女将は王子を抱え上げて

寢所に向かうところだった。

「悪いけど、

そこの荷物を持ってきてくれますか？」

女将はちらりとカーラの方を見て言う。

カーラは女将の視線を追って荷物を見付けた。

荷物と言うのは、

あのお耽美な王子になど到底似合わないような大振の剣だったのだ。

木炭で作られた様に真っ黒い剣は

全体的にくすんだ色をしていて、

あまり高価な物には思えなかった。

「随分変わった剣ね」

カーラは剣を手に取り、まじまじ眺めちらした。

その剣には鞘がなかった。

抜き身なのだ。

刃がないらしい。

見かけほどの重さも無い。

ひよっとしたら、

ただの装飾品なのかもしれない。

そう思いなが

ら物珍しげにカーラは剣を見詰めていたが、  
鐔の部分に何やら奇つ怪な文字が刻み付けられて  
いるのを見付け声を上げた。

「お客さん、どうかしましたか？」

王子を寢所に寝かし付けてきた女将が、  
慌てて戻ってきた。

カーラの上げた声は悲鳴の様だったのだ。

「ここ、これ、この文字マーク族の！」

カーラは剣に刻まれた文字を凝視したまま、  
しばらくの間固まっていたが、  
駆け付けてきた女将の足音に気付き顔を上げる。

「この剣、本当にあの王子様の剣？  
間違いない？」

カーラは確かめるように女将の肩を叩いた。

「そうだけど、それが何か？」

女将は丸くておいしそうな、  
頬の肉を手のひらで撫でながら答える。

「隣国．．．ゴルゴ国の王子様だって  
言っただわよね？」

カーラは女将の答えを待たずに、  
王子の部屋に踏み込んだ。

「ちょ、ちょっと、お客さん！」

女将は慌ててカーラを追うと  
後から羽交い締めにした。

「離してよ。この人に聞きたいことがあるの」

カーラは女将を睨み上げ、  
ジタジタと足で床を叩きつけた。

その喧しさをきたら、  
下の馬小屋でまだ嘶きを止めずにいる、  
あの間抜け面の馬声と大差ない。

「あーうるさい。そんなことは明日にしな！」

女将は軽々とカーラを担ぎ上げると、  
強引に王子の部屋から連れ出した。

カーラは泣きそうな顔で剣を見詰めた。

「その剣がどうかしたのかい？」

女将は大きく息を着き、頭をかいた。

カーラは両手で剣を持ち高くかかげると、

「ガイア」

剣の鏝に彫り込まれている、  
奇妙な文字を読み上げた。

「ガイアって大地って言う意味かしら・・・  
それとも誰かの名前・・・」

カーラは眉をしかめて呟いたが、

「何故あいつの名前を知ってるんだ!？」

突然の第三者の声に飛び上がった。

「あんた。馬の世話は終わったのかい？」

女将は通路の先でこちらを見ている  
痩せた男に声を掛けた。

主人である。



馬の世話を終えて戻ってきたところだ。

主人は女将の質問に答えずに、  
つかつかと歩いてくると、  
カーラの前で立ち止まった。

「お客さん、  
なぜあいつの名前を知ってるんだ！」

口調は怒っているようなのだが、  
顔色は真っ青である。

カーラは剣を差し出すと、

「この人のこと、知っているの？」

病人のように青い顔の主人に聞く。

主人はカーラから目をそらし黙り込んだ。

どう見たって、何か知っている様子だ。

それとも何か、口では言えない  
やばい事でもしているのだろうか？

「王様には黙っててあげるから、  
この人のこと教えて。

じゃないと、あんた達のことバラすわよ」

蒼白を通り越し、

青くなつた顔色の主人にカーラは笑い掛けた。

「すまないカミさんは何も知らないんだ。  
許してくれ！」

カーラのカマ掛けに見事引つ掛かった主人は、  
床に膝を付き頭を抱えて叫んだ。

「あんだ、何やつたんだよ！」

女将は主人の肩を掴み激しく揺すると、  
悲鳴じみた声を上げる。

「すまない。

森のドワーフと取引して、  
小遣い稼ぎを・・・」

「なにー！それはもう止めたって言ったくせに、  
まだやってたのかい！」

かわいそうなくらい小さくなっている主人に、  
女将が怒鳴り付けた。

「ごめんなさいよ。

このことは黙っていておくれ。  
王様の許しなくして、

外部との取引は禁じられてるって  
知っていたんだよ。

でも家の主人たら、お金欲しさに・・・」

よよと女将は泣き崩れたが、

「小遣いが少ないからいけないんだ！」

主人は開き直り床に足を投げ出して座り込んだ。

「このバカ者が！」

女将は主人の足を叩きつけた。

「じゃあ小遣い上げてくれよー！」

主人が泣き付いても女将は取り合わない。

「もう、こんなやつどうなってもいいわ、

城でも何処へでも突き出しちゃって頂戴！」

言葉ではそんなことを言っても女将の顔は、  
もう涙と鼻水でグショグショだった。

「私はただの家庭教師だから、

あなたたちを捕らえる事なんて出来ないけど、  
城の者に言い付ける事は出来るわ」

カーラは気の毒そうに二人を見下ろすと、  
溜め息混じりに言った。

主人と女将は不安そうに顔を見合わせたが、

「でも、このガイアって人に

会わせてくれるんだっ たら黙って いてあげる

カーラは身を 屈めニッ コリと 笑った。

## 脱出

「エレン、まだー？」

大きなバスケットを抱えた白雪が、  
中庭で大きな声を上げた。

「はいはい、今行きますよ」

エレンは持ち物を確認すると、  
待ち切れずに中庭に飛び出した白雪の後を追った。

今日は森の中にある湖に  
ピクニックに行く日だった。

前々から計画立てていた事だが、  
当初の予定より人数がだいぶ減ってしまった。

本当は王妃とカーラも同行する予定だったのだ。

しかしカーラは実家に帰り  
王妃は朝から気分がすぐれないといって休んでいる。

「エレンと二人だけじゃ、  
あんまり寂しすぎるので違う日にしよう！」

と白雪が言ったのだから、  
どう言う訳かエレンが行きたい行きたいと

折れなかったのである。

二人だけでは心配だということで、  
兵士を一人御供に連れてのピクニックになった。

「レッツゴー！」

白雪はバスケットを振り上げ叫ぶと、  
森に向かって駆け出した。

兵士が慌てて後を追う。

エレンは王妃の部屋を見上げた。

外はこんなに良い天気なのに、  
カーテンがピッタリと閉まっている。

「コリーシャ・・・」

エレンはエプロンのポケットに入れた、  
王妃からの手紙を握り締め呟いた。

エレンへ

この手紙に気付いてくれてありがとう。  
今、大変な事が起こりかけているの。

信じてもらえないかもしれないけれど  
私の中に悪魔がいるのよ。

あの鏡の中に封じられていた悪魔が  
私に取り憑いてしまったの。

昼間は鏡の中にいて、

夜になると私の体に入り王に魔法をかけ、  
白雪の血を吸うの。

悪魔は白雪の体が欲しいらしいのよ。

なんとか白雪を助けたいのだけれど、

悪魔は私の考えていることが

何でも分かっちゃまうし、

私が白雪を避けても

悪魔は白雪の行動をいつでも監視しているの。

悪魔は鏡の裏側、

つまり物を映すことが出来る物の裏側に、

いつでもいるのよ。

でも明け方から昼にかけて悪魔は眠るみたいなの。

一番日の光が強い時間だけに、

起きてるのが辛いらしいわ。

その時間を見計らって、

白雪を連れ出してちょうだい。

そしてカーラ先生にこの事を報告して、

助けてほしいの。

先生はこの悪魔の一族の研究をしていたらしいし、

何か良い方法を知っているかもしれないわ。

それから、あの鏡を外して  
壊そうなんて考えないで。

あの鏡に手を触れたら、何が起こるか  
分かったものではないわ。

お願い。白雪を守ってあげて。

コリーシャ

エレンは王妃の窓に向かい十字を切ると、  
白雪の後を追って駆け出した。



## 森

薄靄が白い帯を引きながら、  
朝露に濡れた森の中をゆつくりと漂っている時間、  
子供の背丈程もある長い草をかきわけながら  
二頭の馬が歩いていた。

白馬と栗色の馬は仲良く並んで歩いていた。

それはもう陽気に足取りも軽く・・・  
しかし、乗り手の方は、  
どうにも仲が良ろしくないらしい。

「何処よここは！」

栗色の馬に乗っているカーラが、  
怒鳴り声を上げた。

上げられたのは白馬に乗っている美しい青年だ。

雪のように白い肌、  
ほんのりと桃色がかった頬。

太陽のように明るいブロンドは、  
湿った空気のため、  
何となくペツタリとした印象を受けるが、  
木漏れ日の中で眩しく輝いている。

「何処と言われても、

答えはこいつに聞いて下さい」

真珠の様に白い歯を光らせて、  
白馬の持ち主・・・

王子は天使のような笑みを浮べた。

話は数時間前にさかのぼる・・・。

昨夜酔いつぶれて倒れた王子の部屋に、  
カーラは朝早くから押しかけた。

「王子様お願い！」

この剣を私に貸して下さい。

私こつうものです」

カーラは城が発行している身分証明書を、  
寝呆け眼の王子の目の前に突き出した。

「そうは言われても・・・

こつう見えても一応、国の国宝なんですよ。

むやみに人に貸せるものでは・・・」

「そこを何とか！

どうしてもこの剣を作った人に、

会って聞きたい事があるのよ」

渋る王子に詰め寄り、  
カーラは年がいもなく瞳を潤ませた。

「理由を聞かせてもらえれば、  
考えなくもありませんが」

王子は眉を寄せてカーラを見る。

カーラは口籠もり、

廊下から心配そうに見守っている

主人と女将の顔を見た。

二人は手を横に振って、

声を出さずにダメダメとオフレコ状態だ。

昨夜の主人の話によると、

ドワーフの森には結界が張っており、

人間は入れないと言うのだ。

その中に入るためには、

ドワーフの名入りの道具が必要らしい。

主人はドワーフと取引きをしてはいたが、

そんな御大層な物など持っておらず、

取引話はいつも

ドワーフの方から持ちかけて来るのだと言った。

そんな、いつ来るか分からない取引の日など

待ってる時間はない。

となると王子の持つ剣しかないのだ。

しかし理由を話すとなると、

厩の夫婦がドワーフ達と

取引していたことが分かかってしまう。

別にアルフ国の王子ではないのだから、

話したって問題ないのではとカーラには思えたが、  
昨夜

『何処でどう噂になるか知れないので、

それはよしてくれ!』と

厩夫婦の懇願にあったのだから仕方ない。

カーラは考え込むと、

「その剣に彫つてある文字、

北の山にいたマーク族が使っていた文字なの。

私その研究をしていて・・・

その剣に刻まれている名前と同じ人が

森の中に住んでいるんだけど、

その人に会うには、

どうしてもその剣が必要らしいの。

ね、お願い」

ドワーフという言葉を出さずに、

お願いは出来たが、

王子は眉を寄せている。

「再び悪魔が目覚める時、

光の森中にて墨色の剣は輝きを取り戻し、

「魔を打ち砕かん」

王子は剣を振りかざして呟いた。

「な、なによ、それ？」

カーラは考え深げに、  
剣を見詰めている王子に聞いた。

「私の国に代々伝わる言葉です。

この剣は一〇〇年前、

悪魔を滅ぼすため

妖精に作ってもらった剣だと言われています」

王子はカーラを見て言う。

悪魔を滅ぼすための剣。

それが隣国の城に一〇〇年前からある。

マーク族が滅んだのは一〇〇年前だ。

そういえば、その時代アルフ国は

隣国ゴルゴ国と折り合いが悪く、

いつ戦争が起こってもおかしくない状態だった。

マーク族がいた山のすぐ隣は、

ゴルゴ国の領土だ。

一説では、マーク族はゴルゴ国の襲撃を受けて  
滅ぼされたのだとも言われていた。

マーク族の村は  
アレフ国の統治村であったにもかかわらず、  
城から遠かったせいも謎の多い所だったらしい。

ただ村にはとても美しい伯爵婦人がいて、  
そこで一番の実力者だったという。

「悪魔って何？」

カーラは探るように王子の顔を覗き込んだ。

「さあ？ 私にも判りませんよ」

王子は何とも情けない返答をした。

「もし私の教え子が

その悪魔に狙われているのだと言ったら、  
その剣を貸してもらえるかしら？」

カーラは不本意ながらオカルト的な表現で  
王子に聞いたが、

その言葉は予想外に彼の心を動かしたらしい。

「でも貸すことは出来ないの  
私も同行しましょう」

王子は剣を持ち、立ち上がった。

王子の笑顔を見て、

嘘をついたカーラの良心は痛んだが

『そんなことは後でどうとでも話を繋げればいいわ』と考えていた。

しかし、そんな心配などしなくても、カーラの予感は的中していたのだ。

「方向音痴なのは、馬だけのせいじゃないと思うんだけど？」

カーラは馬上で大きく息をついた。

森の奥へ入れば入るほど霧は濃度をまし、視界を悪くしていく。

「いくら朝とはいえ、ひどすぎない？」

カーラは、隣を並んで歩く王子に声をかけた。

「そうですね・・・」

王子は眉を寄せて辺りを見回した。

もう何処に何があるのか全く分からない状態になっている。

森は白泥のベールに包まれて足元さえも見えないのだ。

「道、間違えたのよきつと」

カーラは後方を振り返ったが、もう自分が何処から来たのかさえ判らなくなっていた。

森の中にいるのではなく、まるで、ただつぴろい

雪原に立っているような錯覚にとらわれた。

「そうでもないみたいですよ」

カーラが不安そうに

キョロキョロと辺りを見回していると、王子が前方を指差した。

先程までは何も見えなかった霧の影に、赤いトンガリ屋根が浮んでいる。

そう、カーラには浮んで見えたのだ。

雲の上に三角錐の積み木が置いてあるように。

「ちょっと、変じゃない？」

カーラは気味悪そうにつぶやき、王子の方に馬を寄せ悲鳴をあげた。

「ちよちよちよちよ、ちよっと、王子様の剣、光ってるわよ！」



王子の腰に下げられていた剣は、  
先程見た時のような黒い色ではなく、  
まるで鏡のような表面に変わっていたのだ。

「どうしたことだ？」

王子が剣を手に取り、振り上げたとき、  
辺りは激しい光に包まれた。

真っ白な光に両目を覆われ、  
再び目を開いたカーラは声をあげた。

辺りを包んでいた霧は跡形もなく消え去り、  
周りは美しい緑に包まれた森にかわっていた。

そして、その木々の間に  
真っ赤な屋根の小さな家が建っている。

「どうやら抜けたらしいですね」

王子は剣を腰に戻すと、  
家の方に向かって馬  
を進めた。

剣は墨色に戻っている。

「抜けたって、何を？」

カーラは慌てて馬を走らせる。

「何をつてドワーフの森でしょ？」

王子はニツコリ笑ってカーラを見た。

「あ、あなた知っていたの？」

カーラは目を丸くしたが  
王子は顔色一つかえずに、

「この剣、妖精が作ったっていったでしょ。

妖精つて、ドワーフだったらいいんですよ。

森の事は本を読んでいたから知っていたことだし、  
まさかとは思いましたけどね」

馬の腹を蹴って、

ゆっくり家に向かって歩きだす。

## 狩人の息子

春の日差しを受けて、  
森の中にある湖はきらきら輝いていた。

その澄んだ輝きとは裏腹に、  
エレンの気持ちは重かった。

湖から少し離れた場所にシートを敷き、  
大きなピクニックバスケットを開いて  
白雪はごきげんだが、  
どうにも邪魔者が一人。

護衛として付けられた兵士である。

楽しいピクニックにはそぐわない重装備で、  
隙なく辺りに目を光らせているのだ。

「一緒にお茶でもいかが？」

と、エレンが眠り薬入りのお茶を進めても、  
勤務中の一点張りで舐めもしてくれない。

エレンは白雪を自分の実家に連れていこうと  
考えていたのだ。

どうやって兵士の目を欺こうか。

森の中を散策すると言っても

当然ついて来るだろうし．．．。

エレンはティーカップの中に映る自分の顔を見詰めながら

「ふうっ！」と溜め息をついた。

白雪は湖に足を付けて呑気に水遊びの最中だ。

兵士がいるから王妃様の話も出来ない。

エレンは空を見上げた。

太陽が丁度頭のとっぺんに来ている。

もう正午なのだろう。

「そろそろお昼に．．．」

「きゃあああ！」

エレンが重そうに腰を上げたとき、

白雪が悲鳴を上げた。

足でも滑らせたのだろうか、

エレンは白雪の方を見たが、

想像もしなかった場面が展開していたので、

一瞬、体が硬直してしまった。

「ひひひ姫様！」

エレンが駆け出すよりも早く、  
お付きの兵士が剣を抜いて飛び出した。

手足をじたばたさせている白雪の体を、  
湖から伸び上がった透明なゼリー状の物体が、  
彼女を羽交い締めに行っているのだ。

「やだやだ、たすけてー！」

白雪は大手を振って、ゼリーを叩いたが、  
そんなことをしても水しぶきがあがるだけである。

「白雪姫を離せー！」

湖面から伸びだしている辺りで  
兵士は剣を振ったが、まるで手応えがない。

何度剣を振っても結果は同じである。

「なによ、これ!？」

兵士の脇に駆け寄ったエレンが眉を寄せたが、  
聞かれた方にだってわからない。

その時、

『何処へ行くんだい、エレン?』

ゼリーが青白い光を放ち、  
聞き慣れた声が辺りに響いた。

「お母様?」

白雪は暴れるのを止めて辺りを見回す。

しかし王妃の姿はどこにもない。

『白雪よ、私を置いて、何処に行くというの。  
お母様を悲しませないでおくれ』

「私は何処にも行かないわ。  
それより何処にいるの、お母様！」

白雪はどこから聞こえてくるのか判らない  
王妃の声に答える。

『それなら早く帰ってきておくれ。  
お母様は今、

悪い悪魔に取り憑かれているんだよ。

このままでは殺されてしまう。

早く、早く来ておくれ・・・』

「姫様、悪魔はそいつです。

本当の王妃様は姫様を守るため、

私に姫様を連れて逃げるように言ったのですよ！」

エレンは白雪の手を取って、  
ぐいぐい引っ張った。

びくともしない。

『ほほほほ。そんなことをしても無駄だよ。』

私は何処にでもいる。

城から離れたこんな場所にだって来れるんだよ。  
命が惜しかったら、早く城に戻っておいでエレン」

「戻らなかつたらどうだっていうのよ」

エレンはエプロンのポケットに手を入れた。

たしかこの中に、

実家を出るとき母親からもらった物が．．．。

『ここで殺すまでさ！』

ゼリーは白雪を突き放すと

エレンに飛び掛かった。

「これでも食らえ！」

エレンはポケットから手を抜くと、

ゼリーの化物に向かって、

銀の鎖が付いた十字架を投げ付けた。

『ぎゃああー！』

ゼリーは大きくのけぞると、

目にも止まらぬ速さで水面に潜ってしまった。

『何処にも逃げられないよ。』

何処にもね。

私は何処にでもいるのだから。

物を映すことの出来る全ての物の裏側に・・・」

湖全体がボーツと青い光を放ち、  
不気味な言葉を叫んだ後、  
辺りは静まり返った。

「エエエエ、エレン！」

白雪はエレンに抱きつき悲鳴を上げた。

「なに今の！ なに今の！！」

訳が分からず白雪は叫ぶが、  
エレンだって初めて見たのだ。

答えようがない。

「早く帰ろうよ。お母様が心配だわ！」

白雪は涙を溜めながら言ったが  
エレンは首を振る。

「今言ったでしょ。」

王妃様は姫様を城から連れ出すようにと・・・」

「だって、お母様は？」

一人でどうするのよ。

お父様に話せばきつと何とかしてくれるわ」

白雪は城に向かって駆け出しかけたが、



エレンの一言で力が抜けてしまった。

「王様は、もう悪魔の言いなりだそうです。

国中の厩の馬を集めたのだから、

変じゃないですか？

おそらく悪魔に唆されたんですよ」

エレンは十字架を拾い上げ白雪の首に下げた。

「早くここから離れましょう。

うかつに内緒話も出来ないわ」

エレンはいそいで片付けをすますと、

白雪の手を引いて湖から離れた。

若草の茂る湖辺を

白雪の手を引きながら歩いていくエレンの背に、

「さっきの話は本当なのですか？」

護衛役の兵士が

湖の方をちらりと見て聞いてくる。

エレンは頷くと辛そうに目を伏せた。

何処にでもいるなんて、

じゃあ何処に逃げれ

ばいいというのだろう。

物が映らない場所なんて、

この世に存在するのだろうか？

「何処にいたって同じなら城に帰ろうよ。  
さっきの悪魔エレンを殺すって  
言ってたじゃない。」

私嫌よエレンが死んじやうなんて！」

白雪はエレンに飛び付いた。

泣き叫ぶ白雪を、エレンがなだめていると、  
兵士が何か考え深げな顔をして  
二人のもとへやってきた。

「城に遣える身である私が  
こんなことを言うのもなんですが、  
良い場所がありますよ。」

兵士は鎧を脱ぎ捨てて  
その上にマントを被せた。

兵士の鎧は鏡のようにピカピカで、  
白雪とエレンの姿をくっきりと映していたからだ。

そんな物の前で内緒話は出来ない。

「光の射さない、  
じめじめした洞窟の奥なんて嫌よ。」

白雪は眉間に深く皺を寄せて  
兵士を睨み上げたが、

兵士はニツコリと笑って森の中を指差した。

「私の父は、森で狩人をしているんですけど、  
ちよっと変わった知り合いがいるんですよ」

白雪とエレンは、

物が映り込みそうな持ち物をすべて捨てて、  
兵士の後に付いて行った。

「これってほとんど誘拐よね」

道々、白雪は冗談ばく笑ったが、  
エレンと兵士にとっては、

冗談抜きで顔を青くさせる一言だった……。。

## ドワーフ

「まさかその剣を持った者が、  
やってくるとは思いもしなかった」

差し出されたハーブティーを受け取り、  
カーラは王子が持つ剣の作り主、  
ガイアを、ちらりと見た。

妖精などと言うから、  
もっと変わった容姿をしているものだと  
思っていたが、なんてことはない。

人間より、いくらか背が低いだけの違いである。

身長は一三〇センチメートルと  
言ったところだろうか。

そのわりに妙な存在感があるのは、  
立派な体躯のせいだろう。

この家には七人のドワーフ達が生活していた。

皆、サンタクロースの様な髭を生やしている。

おまけに外見は頑固そうな、  
ただの爺さんなのに、

意外にも丸太の様に太い腕をしていて、

それがブヨブヨの脂肪などではなく  
引き締まった筋肉なのだから驚きだ。

カーラと並んで座っている王子など、  
ひよろひよろもやしで、  
なんとも頼りなさげに見えてしまう。

「その剣を造ったのは今から

一〇〇年ほど前の事だ。

ゴルゴ国の王に頼まれて造った物だが・・・  
やはり滅ぼし損ねた悪魔が再び現われたのか？」

ガイアは二人の手前の席に付くと、  
細く長い眉を寄せた。

「隣国に悪魔なんていたの!？」

カーラは王子の顔を見た。

王子はお茶を飲みながら、  
なにやら考え深げな顔をしている。

「そうか、人間の寿命と言うのは、  
わしらとは比べものにならないほど  
短いものだったな。

わしにとっては、ほんの一〇〇年前の話でも、  
お前さん達にしてみれば、  
知りもしない大昔だろう」

ガイアは大きく息をついた。

「お前さん達、  
ベラ・バトリーと言う名を  
聞いたことがあるかい？」

ガイアの言葉にカーラは眉を寄せた。

どこかで聞いた名前だ。

しかも、ごく最近……。

「ベラ・バトリーとは、

北の山の麓に居を構えていた

女悪魔のことだよ」

「北の山の麓って、

マーク族の事じゃないんですか？

悪魔だなんてそんな話、

今まで一度だって聞いたことありません」

カーラは声を荒げた。

「カーラと王子は隣国どうしだろう。

マーク族のこと、どう聞いているか話してみる」

ガイアは小さく笑うと

ティーカップに残ったお茶を一気に飲み干し

二人を見る。

カーラは王子の方を見た。

王子は「お先にどうぞ」とでも言わんばかりに優雅な手つきで、お茶を飲んでいゝる。

「マーク族は不思議な文化を持った

一族だと伝えられているわ。

特に文字が魔法を持っているとか、

あと、これは嘘でしょうけど

不老不死の力を持っていたとも．．．」

カーラは考え事でもするように話すと、  
ガイアは白い髭を揺らして笑った。

「一部はあっているな」

「一部？」

カーラは眉を寄せた。

何処があっているのだろうか？

カーラが疑問をぶつける前に、

「では、滅んだ理由は？」

ガイアが聞く。

「土砂崩れだと聞いています」

「はははは！」

突然笑われカーラはビクリとした。

笑い声に驚いたのではない。

その笑い主が王子であったからだ。

「な、なんなのよ」

「一〇〇年前、

北の山付近で頻繁に起こっていた事件を  
ご存じですか？」

王子はテーブルの上で手を組みカーラを見た。

カーラが首を振ると、

「誘拐が多発していたんですよ。

特に若い娘のね」

王子はガイアの方をちらりと見る。

ガイアは新しく入れたお茶を口に運び

王子の話に耳を傾けていた。

「おかしなことに、

その被害者はゴルゴ国の娘ばかり。

そして娘達は決まって北の山の麓あたりで  
消息をたっているんです。



当時の国王は、

これはアレフ国の仕業に違いないと考えました。そして、これを口実にアレフ国に攻め込むつもりだった。

しかし、証拠がありませんでした。

確かな証拠がなければ

一方的に攻め込む訳にはいきませんからね。

それに戦を望まない国民たちも

納得しないでしょう。

国王は確たる証拠を掴むために

罠を張ったんです」

「罠？」

カーラは声を落とした。

初めて聞く話である。

「城の侍女を一人、

北の山の麓に向わせたのです。

兵士を数人見張りに付けて。

森の中で侍女は数人の黒服の男たちに

捕まりました。

でも彼等はアレフ城の者には見えなかったのです、しばらく様子を見ることにしました。

そして囿の役の侍女は

マーク族の村に連れて来られたんです。

我が国の兵士はそこで何を見たと思いますか？」

王子はカーラに聞いた後、  
ガイアに目を向けた。

ガイアの表情は固い。

カーラは唾を飲み込んだ。

「若い娘達の血を浴びて高笑いする女、  
ベラ・バトリー」

「まさに悪魔だな。  
マーク族の不老不死は事実だ。  
だが悪魔に魂を売った  
ベラ・バトリーだけの話だが」

ガイアがカーラの方を見ると、  
彼女は小さな声で何か呟いた。

顔は蠟のように白い。

「なんですか？」

その言葉を聞き取れずに  
王子がカーラの肩を叩く。

「ベラ・バトリー。  
その人が書いた本が城にありました。  
そしてマーク族の物であろう鏡も・・・」

「鏡だと!？」

カーラの言葉にガイアは声を上げた。

「ベラ・バトリーは鏡の愛好者だった。  
鏡をたくさん持っていて、

その中に、一つだけ特別な鏡があった。  
じゅがんきょう  
呪願鏡とって

自分の魂を封じる事が出来るものだ。

悪魔に魂を売り手に入れたそうだ。

通常ベラ・バトリーは若い娘の生き血を浴び、  
飲み続けて美貌を保っていたらしいが、  
やはり人間。

寄る年波には勝てない。

自分の容姿に衰えが感じられた時、

彼女は呪願鏡の中に自分の魂を封じた。

そして自分の好みに合った

若い娘の体をさらってきては、

その体に自分の魂を宿らせたらしい」

ガイアはカーラと王子の顔を見合わせた。

カーラは蒼白な顔で王子を見た。

王子は剣を腰から外し、  
テーブルの上に置いた。

「マーク族の村から帰ってきた兵士は  
王にそのことを話し、

悪魔殺しを頼みました。

その時作られた剣がこれですね」

王子は剣を撫でた。

真っ黒な墨色の剣は、

部屋の中を照らすランプの光さえ返さない。

すべての光を吸収し、まるで闇の様だ。

「だが、とどめを刺すことが出来ずに、

討伐に出た城の兵士達もろとも

村は土砂に埋もれた」

ガイアは何かを思い出すように呟いた。

「じゃあ、マーク族を滅ぼしたのは

貴方の国だったの？」

「そういうことになりますね。

でも悪魔を滅ぼすことは出来なかったのです。

その時助かったのは悪魔討伐に参加した

第二王子だけでした。

彼がこの剣を持ち帰ったのです」

カーラの意外そうな言葉に王子は

あっさり答えた。

なんてことだろう。

よりによって、こんな信じられない事が

一〇〇年前に起こっていたなんて……。

悪魔ですって？

そんなものが本当に存在するのだろうか？

カーラは眉をしかめたがハツとした。

「そんな事があつたのなら、

アレフ国の王様も黙っていないはずよ。  
討伐に出掛けたって・・・」

「当時のアレフ王は

ベラ・バトリーにぞつこんだつたんだよ。

と言うより、操られていたんだろうな。

マーク族の村は、

独立した一つの国家のようだった。

そして統治者はあの女悪魔だ」

ガイアは大きく息をついた。

「それにしても、

よく戦が起こらなかつたわね。

統治村が起こした罪を理由に、

ゴルゴ国はアレフに攻め込めたんじゃないの？」

カーラは首を傾げた。

こんなチャンスを見逃すなんて考えられない。

「第二王子が助かったと言つたでしょう。

彼が悪魔の呪いの言葉を聞いていたのです。

『これ以上かかると、お前の国を滅ぼす』と。  
当時の王は臆病者でしてね。  
それを鵜呑みにしたんですよ。  
そしてそれは今に至っている」

王子は可笑しそうに言う。と剣を撫でた。

「最近マーク族の村があった場所を  
発掘していると聞いて、

気にはしていたが、

まさか鏡が見つかるとは。

土砂くらいで呪願鏡は割れなかったんだな」

ガイアは眉間に皺を寄せ、

テーブルの上に置いた拳を握り締めた。

肩の筋肉が大きく盛り上がる。

「カーラの言うことが確かなら、  
大変な事になるぞ。

女悪魔は新しい体を手に入れたら、

また王をたぶらかし、

再び悪事を働く事だろう。

そういえば、あんたの城には

キレイな王妃と王女がいたな。

早く戻ったほうがいい。

そして、ここに連れてくるんだ。

ここなら女悪魔も入ってこられない。

それから、この後の対策を考えよう」

そう言つてガイアは立ち上がると、隣の部屋から小さな小箱を持ってきた。キレイに細工されたその箱は、ドワーフ達の作品だろう。

こんな細かな作業が出来そうな外見ではないが、彼等は本当に腕の良い職人らしい。

ガイアは箱の蓋を開けると、小さな鏡を取り出した。

直径一〇センチメートルくらいの丸い小さな物だが、鏡の裏面には、十字架をデザインした彫り物が施されていた。

「女悪魔は、鏡の裏に潜んでいる。そこから引きずり出すには、この鏡が必要だ。持つて行くがいい」

ガイアに差し出された鏡をカーラは受け取ると、不安そうに眉を寄せた。

鏡に映る自分の顔を見詰め、

「ひよつとしたら、もう手遅れかもしれない・・・」

喉の奥に何か詰まっているような声で呟いた。

「王様、変なことをしたのよ。」

厩の馬を、すべて城に集めたりして・・・  
それに雨が降ったわけでもないのに、  
土砂崩れにもあつたわ。  
まるで私を  
城に帰したくないような事が続いた・・・  
それに私が城をあけるきっかけになつたのも  
マーク族の・・・」

カーラは真つ青な顔を伏せ声を震わせた。

隣に座っている王子が、  
カーラの肩を叩いたが、  
彼女の気持ちはおさまらない。  
なにかとても嫌な気がする。  
とカーラは思った。

それは城を出た時からずっと続いている、  
なんとも言えない嫌な感じだ。

ガイアは気分の悪そうなカーラの手を握ると、  
ニツコリ微笑んだ。

「それはカーラの思い過しだろう。  
女悪魔はまだ外には出てきていない。  
出てきていたら、この剣が光を取り戻す。  
悪魔を滅ぼすためにな。  
見てみる、剣は真つ黒なままだ。  
悪魔はまだ鏡の中さ」

ガイアの言葉に、



カーラはいくらか救われた気がしたが、  
間を置かずに王子が  
不安をあおる様な言葉を口にした。

「この森に入るとき、  
剣が光りましたけど、  
それはここに入る為に  
必要な事だったんですか？」

王子の質問にガイアの顔色が変わる。

「なんだと、剣が光ったのか？」

「そうです」

王子は速答した。

「それでは悪魔はもう、  
外に出てきているということではないか！」

悲鳴のような声でガイアが叫んだとき、  
豪快な音を立てて部屋の扉が開いた。

ガイアの仲間の一人が、  
血相をかえて飛び込んでくる。

「大変だ。森の狩人から連絡があつて、  
これからここに、お姫さんが来るらしい。  
ひよつとして、

カーラさんの知り合いじゃないかな？

アレフ城の人だっって言ってたから」

入ってくるなり、

そのドワーフは一気にまくしたてた。

「白雪姫が!？」

カーラは椅子を倒して立ち上がった。

「そんな名前だと思っけど・・・

なんでも悪魔に追われているとか」

ガイアよりも、いくらか若そうなドワーフは考える様に頬を撫でると大きく頷いた。

『余計な事をしてくれたな王妃よ。

しかし、私の手からは逃れられんよ。

白雪が何処に逃げようが、

私にはお見通しだ。

『ごらん健気に森の中を逃げ回っているよ』

鏡の中には白雪姫とエレン、

そして兵士の姿がはっきりと映っていた。

『どうだい？

くやしいだろう？

頼みの綱らしく思っている、

あの女教師は  
城に辿り着くことも出来ないだろうしね。  
今頃は隣村辺りで立往生だろうよ。』

王妃の頭の中で響く不気味な声は、  
楽しそうに笑った。

『ほほほ。』

今夜も王に取り入って、  
明日は森の大搜索といこうかね。  
楽しみだこと!』

ほーほほほ!と悪魔は高笑いをしたが、  
王妃は何の反論もしなかった。

『どうしたんだい？』

ずいぶんとおとなしいじゃないか。

私の目を欺いた女が』

悪魔は嫌味たらしく王妃に言った。

「お願いだから白雪には手を出さないで」

王妃は鏡に映る白雪の姿を見詰めながら、  
涙を流した。

『ほほほ。』

悲観と涙は悪魔を呼ぶものだよ。  
気を付けることだね。』

悪魔が楽しそうに言ったとき、  
王妃が声を上げた。

「鏡が．．．」

今まで白雪たちの姿を  
くつきりと映していた鏡が、  
急にくすんだのだ。

王妃の言葉に悪魔が悲鳴のような声を上げた。

『馬鹿な。何処に隠れたというんだ？』

森の中には、朝露に濡れた葉や草木が  
たくさんあるのに！

しかも今日は霧がたちこめている．．．  
まさか．．．』

悪魔は小さく呟くと、

王妃の意識中から気配を消した。

また城のどこかに行ったのだろう。

王妃は大きく息を付くと、

胸に下げた十字架をしっかりと握り締めた。

「白雪、無事に逃げて．．．」

## 悪魔

「大体話は分かったが、悪魔が外に出てきたのなら、倒すのは困難になったな」

ガイアはカーラと王子について、新たな三人の訪問者にお茶を注ぎながら言った。

白雪とエレンの到着にカーラは胸を撫で下ろしたが、後一人が王妃ではなく、二人を助けてここまで連れてきた兵士だったので、心穏やかになれなかった。

おまけにエレンの話では、悪魔は王妃に取り付き、白雪の体を狙っていると言っではないか。

王妃の身が案じられた。

「初めに聞こう。」

「皆あの悪魔を滅ぼすことに異存はないな？」

丸いテーブルを囲む様にして席に付いている者達の顔を見回し、ガイアは言った。

皆、一様に頷く。

ガイアは軽く咳払いをすると、

「では、悪魔の鏡に．．．

あの呪願鏡に姿を映したことがある者」

「あたし、映った」

白雪は手を上げた。

カーラとエレンもお互いに顔を見合わせ

ガイアに視線を移す。

「では、お前さん達三人は、

悪魔退治には参加出来んな」

ガイアの言葉に、白雪はブーイングだ。

「どうしてよ、なんでよ！

あたし、お母様を助けに行くわよ！！」

白雪はテーブルを叩いて叫んだ。

「悪魔の監視能力が効くのは、

呪願鏡に姿を映したことがある人間のみ。

その他の人間の行動までは知ることが出来ない。

だから呪願鏡に映ったことのない者しか、

悪魔に近付けないのだ」

ガイアは、言聞かせるように白雪に言った。

しかし、白雪は膨れっ面をやめず、  
一瞬ひらめいた考えを口にしようとした。

しかし、その言葉はガイアの一言によって、  
あっさりくつがえされた。

「どんなに上手く変装しても、

悪魔にはお見通しなんだよ、お姫さん」

なだめるように言われ、

白雪は口をつぐむしかなかった。

「ではどうやって悪魔をやっつけるんですか？

私達が城に近付けないじょう、  
鏡のある所にだっていけないわ」

カーラは、先程ガイアに手渡された  
鏡を見詰めながら呟いた。

「でも王妃様の手紙を読む限り、

明け方から昼近くまで、

悪魔は行動出来ないらしいです」

ポケットのエプロンから手紙を取り出し、  
エレンが言う。

ガイアは手紙を受け取り、

素早く目を通すと浅黒い眉間に

深く皺を寄せ唸るように声を上げた。

「この時間内だけなら  
悪魔に悟られずに動くことが出来るな。  
しかし数時間だ」

「数時間でも、その隙に城に入つて、  
鏡を壊すことは出来るんじゃない？  
あの鏡を割つてしまえば、  
解決する事なんですよ？」

じれったそうに、白雪はガイアに詰め寄つた。  
しかしガイアは動じずに首を振つた。

「そんなに簡単なものではありませんよ白雪姫。  
王妃様の手紙には、  
王様は悪魔の言いなりだと書いてあります。  
おそらく城では白雪姫を連れて姿を消した  
エレンや兵士のことを誘拐犯に  
でっちあげているだろうし、  
どうやら私も、悪魔には邪魔な存在らしいのよ。  
そんな人間が城に行つたつて  
捕まつてしまつただけだわ」

カーラはいまいましたげに爪を噛む。

「では、ここで城に近付くことが出来るのは  
王子だけか。」

カーラと王子が悪魔についての話をしたのは、  
丁度悪魔が眠っている時間だつたらう？」



ガイアは会話に加わらず、  
聞き役にまわっている王子に目を向けた。

「でも、よその国の人に頼るのは・・・」

優雅な手つきで紅茶を飲んでいる王子を、  
エレンは申し分けなさそうに見た。

王子はティーカップをソーサーに戻すと、  
テーブルの上に置いた剣を指先で撫でた。

「私の国にとっては他人事ですが、  
悪魔の存在を許す訳にはいきません。  
もとはといえば

一〇〇年前に倒し損ねた悪魔。

わが国の汚名返上にもなりますし、

アレフ国が悪魔の手に落ちれば、

隣国であるゴルゴ国も

無事にすむとは考えられません。

それに一〇〇年前の件でおそらく悪魔は  
ゴルゴ国の事を恨んでいるでしょう。

そう考えれば、私が手を貸すことなど  
造作もないことです」

王子は顔を上げニッコリ微笑んだ。

「それなら話は早い。

王子には城に入ってもらおう」

ガイアはお気楽に言ったが、  
カーラとエレンが同時に声を上げた。

「そんな簡単に入れるものじゃないですよ！」

エレンが責めるようにガイアに言った。

その隣でカーラも頷いている。

「城ではたくさんの方が働いている。

一人くらい知らぬ顔の者がいても  
不思議はなからう。」

それに兵士は一カ月単位で

出入りがあるのだろうか？」

ガイアが兵士に聞くと、兵士は頷いた。

確かに城を守る兵士は統治国内の若者たちが、

一月毎に、お勤めに来る職である。」

「でも証明書がないと入れないんです！」

カーラが駄目押しとばかりに叫ぶ。

「そんなものは造れば済むことだろう」

ガイアが唇の端をつりあげて笑った。

「都合良く、

ここには偽装が得意なドワーフもいるんでな」

「私ちよつと不安だわ」

窓辺に腰掛け、月を見上げていたカーラが、  
剣を研いている王子に言った。

「何がですか？」

王子は剣を壁に立て掛けると、  
ベッドに腰掛けた。

丁度カーラと向かい合う具合になる。

カーラは王子を見詰めると、

「王子様が頼りなく思えるからよ！」

カーラは恐れ多くも

王子様にたいして暴言をはいた。

まあ自分の国の王子ではないのだ。

名前で呼んでも罪はないかもしれない。

「人を見かけで判断するのは・・・」

「見かけじゃなくて家柄よ、育ちよ。

貴方は王子様なんだから

一般市民と同じ様な態度が

とれるかどうか不安なのよ。

城の雇われ兵士・・・

特にお勤めで来ている統治町や村の兵士達は

ペーパーなの。

一番地位が低いのが分かる？」

カーラは王子の鼻っ面を指差し、

確認するように言った。

「はあ・・・」

王子は気のない返事だ。

「って事はよ、どーでもいい雑用や、

いい加減なインネンを付けられる事が良くあるの。

王子様でしょ？ 貴方。

そんなことに耐えられるの？

まかり間違つて、無礼者ー！と

剣を抜かないとは限らないし・・・」

「ははははっ」

真剣な面持ちで話すカーラに、

王子はさも可笑しそうに笑った。

「確かに私は王子です。で

も将来城を継ぐ後継ぎが、

呑気にこんな所でウロウロしていられると  
思っているのですか？」

もっともな王子の話に、カーラは声を上げた。

「貴方．．．次男？」

眉を寄せて王子に聞く。

「次男だなんて嬉しいことを言ってくれますね。

私は五番目の王子です。

だから将来的には婿養子に出される運命なんですよ。  
だから少しくらい勝手な行動をとっても

王は見えて見ぬふりです」

ごろりとベッドに寝転がり王子は笑った。

「でも、こんな大事な剣を持たせるんだから．．．」

「私の国では悪魔の話など

今では、ただの御伽噺になっていますよ」

それでも腑に落ちないカーラが何かを言いかけると、  
王子が割って入った。

「それに国を脅かす悪魔を倒し損ねたなんて、  
いえると思いますか？」

私の国では一〇〇年前に

悪魔を滅ぼしたって事になっていますから。

それに私なんか

子供の頃から城下に出て遊んでいましたから、心配しなくても

「無礼者ー！」なんて立派な言葉は、ちよつと考えなければ出てきませんよ」

王子はカーラを見上げクスクス笑った。

「何か色々大変そうね、他国の王子様も・・・」

カーラはちよつぴり気の毒そうに王子を見た。

白雪を寝かし付けた後、

エレンは庭に出て夜空を見上げていた。

星は美しく輝いていたが、

今のエレンには、

それを観賞する余裕もなかった。

「コリーシャ、大丈夫かしら・・・」

城のあるほうを見詰めて呟いた時、

家のドアが開いてガイアが現われた。

「眠れないのかい？」

ガイアはエレンの傍らに立ち彼女を見上げた。

「王妃様は私の小さい頃からの友人なんです。いくら姫様を守るためとはいえ、王妃様を残して来たことが悔やまれて・・・」

エレンはエプロンの裾で目頭を押さえた。

ガイアは星を見上げるように顔を上げると、

「王妃様は安全だよ。」

危険なのはむしろ白雪姫の方だ」

一際輝く一等星を見詰め呟く。

「どういうことですか？」

ここに居れば安全だと言ったじゃないですか」

エレンは眉を寄せてガイアを見下した。

ガイアは白雪が眠っているであろう

部屋の窓に目を移す。

「悪魔が毎夜、

白雪姫の血を吸っていたというのは本当か？」

昼間エレンに渡された

手紙に書いてあった事をガイアは聞いた。

エレンは悪魔の姿を見たことはないし、本当に白雪の血を吸っていたかどうかは

彼女にも判らないことだ。

しかし手紙に書かれていることが事実ならば間違いはないはずだ。

「多分．．．」

エレンは自信なさげに頷く。

「どうやら悪魔は

本気で白雪姫の体をもらうことに決めたらしい。体を手に入れるには、

自分の中に相手の血を取込み、

相手には反対に自分の気を送り込む。

乗っ取りやすい魂、

乗っ取られやすい体にするためだ。

要するに、白雪姫と体の一体化を

はかるわけだな。

まあ結果的には悪魔に体を取られた人間の魂は消滅してしまうが」

「では、姫様の体が

悪魔に近いものになっていると言っんですか？」

エレンが悲鳴じみた声を上げると、

ガイアは小さく頷いた。

「そんな．．．ではどうすれば．．．」

エレンは血の気の引いた顔でガイアに聞いた。



「今の白雪姫の体は、  
悪魔の半身と言っても過言ではない。  
悪魔の監視力がこの森に及ばないと言っても、  
自分の気をたどってくれば  
悪魔はここに来ることが出来るはずだ。  
まあ結界の中で妙な魔法は使えんがな。  
だがそれを防ぐことは出来る」

ガイアは大きく息を付いた後、  
不安な表情で自分を見下ろすエレンに視線を移す。

「城の様子を探るのは王子の役割。  
その情報をここに運ぶのは、兵士の役割だ。  
女のエレンにこんなことを押しつけるのは  
どうかと思うが・・・」

「大丈夫です。  
私、王妃様と姫様を助けるためなら  
何でもします！」

言い掛けるガイアの言葉に割って入り、  
エレンは叫んだ。

ガイアは頷くと、エレンの手を引いて、  
森の奥へと入っていった。

## 林檎

ガイアに連れられて、

エレンは大きな林檎の樹の前に連れてこられた。

大きいなんて一言では済まされない。巨

大な林檎の樹だ。

「なんて大きな木・・・」

エレンは樹の根元まで

歩いていくと顔を上げた。

月明りに照らされ、

大きな塔の様に見える林檎の樹は夜風を受けて  
たくさん梢を揺らしていた。

生い茂る若葉の間に

樹の大きさと比べると、

不釣り合いなほど小さな実がなっていた。

実る時期ではないのに・・・。

「林檎は神の食物だ。

それを体に取り入れることによって  
体内は浄化される。」

この林檎を白雪姫に食べさせれば、  
悪魔の悪い気は抜けていくだろう。」

ガイアは惚けたように  
樹を見上げているエレンに言った。

実を取るのには容易な事ではない。  
まず樹に登らなくてはいけないのだ。

「私が取ってくるんでしょっか？」

エレンは振り返りガイアを見た。

「出来ることならわしが取ってやりたいが、  
林檎は妖精族には取れないのだよ。

なんせ神の食物だからな。

しかし、人間は大丈夫だろう？」

ガイアは少々皮肉っぽく言った。

確かに昔、人間は悪魔に騙され林檎を取った。

でも、その罪で自分に皮肉を言われたって……。

エレンは恨みがましくガイアを見詰め

そう思うと、太く伸びた根子に手を掛けた。

そう簡単に登れるような代物ではない。

根子の部分だけでも、

普通サイズの木と同じくらいの

高さがあるかもしれない。

これほど大きな樹ならば、  
城からでも見えるだろう。

今まで気付かずにいたとは、  
ドワーフが張る結界と言うものは  
たいしたものだな。と

エレンは考えた。

考えているうちに根子部分を  
登りきり幹に辿り着いた。

「おーい」

下からガイアの声がしたが姿は見えない。

「なんですか？」

エレンは下方に向かって返事をした。

「幹を叩けば実は落ちてくるぞ。  
落ちてきた実を一つだけ取るんだ。  
いいな、一つだけだぞ」

ガイアの言葉にエレンは頷くと、  
カ一杯幹を叩いた。

と同時に小さな林檎の実が  
滝のように落ちてきた。

「きゃあー！」

エレンは頭を抱えて悲鳴を上げたが、  
林檎の方は彼女が嫌いみたいだ。

見上げると、

顔面に向って林檎が落ちて来るのが分かったが、  
ぶつかる寸前に器用に方向転換しているのだ。

「な、何？ 気持ち悪い！」

エレンは落ちてくる林檎を見ながら呟いた。

「早く取らないと、みんな落ちてしまうぞ！」

ガイアの声のエレンは気をとりなおすと、  
落ちてくる一つに手を伸ばして、それを取った。

と同時に林檎の落下はぴたりと止まり  
辺りに静寂が訪れた。

「これがあれば姫様は助かるのね」

エレンはエプロンのポケット  
に小さな林檎を大事にしまつと  
慎重に根子を下りていった。

## 進入

林檎を食べた白雪は、  
一種の仮死状態になった。

こうして眠らせることによって、  
悪魔の気を抜くらしい。

白雪の体から抜けた悪魔の気は、  
彼女の枕元に置かれた  
鏡の中に吸い込まれていく。

悪い気がすべて体内から抜け出た時、  
鏡は割れると言う。

白雪が眠りについてから、  
三日がたった夜、  
城に入り込んでいる王子からの手紙を、  
商人に扮した兵士が持ってやってきた。

「なんてことだ！」

王子からの手紙に目を通したガイアは  
悲鳴のような声を上げた。

「いくら森を搜索しても  
この場所には入れないと知った悪魔は  
森を焼き払うつもりだ。  
火なんか放たれたら、

結界は破れてしまう！  
ぐずぐずしてられない。  
今夜中に手を打たなくては！」

ガイアは家中のドワーフ仲間を集めると、  
手際良く分担を決めていった。

「森に火をつけるなんて、そんなこと・・・」

信じられないといった口調で

カーラは呟いたが、  
相手は悪魔である。

自分の欲の為に森を焼くことなど、  
少しも咎めない事なのだろう。

「よりによって、

悪魔が一番活発に動く時間に  
戦いを挑むことになるとは・・・

これも悪魔の策略の一つか」

ガイアは悔しそうに呟いた。

兼ねてから立てられていた

ガイアの計画であれば間違いなし！と

カーラは考えていたが、

実行が夜となつては危ぶまれる。

ガイアの計画では、

悪魔意外の人間は一切相手にしないことにあつた。

一番手っ取りばやし方法。

城内の者達を、すべて眠らせるのだ。

そして城の周りに結界を張り、

悪魔が逃げ出せないようにする。

本当は白雪の目が覚めてから、

朝のうちに行く予定だったのだが、

思った以上に白雪の体内には

悪魔の気が入っていたらしく、

回復までかなり時間がかかりそうなのだ。

おまけに悪魔は、

そんなに気の長いほうではなかったらしい。

待ち切れなくなって、

自分から戦いを吹っかけてきたのだ。

「それぞれ支度したら城に向うぞ」

ガイアは祭り前夜のように

大わらわの室内を見回し、皆に言う。

「準備もなにも、私たちはどうしたらいいのよ」

カーラが不満声を上げる。

「そうですよ。」

私とカーラ先生の行動は、



悪魔にバレバレなんでしょう？  
森から出ることは出来ないんじゃないんですか？」

エレンが眉を寄せてガイアを見た。

ガイアは咳払いをすると考え深げに俯いた。

「おそらく悪魔は、

今夜わしらが何かしようとしている事に  
気付いていると思う。

しかし、今夜行かなければ、もう後はない。  
それを悪魔も知っているはずだ」

ガイアはカーラとエレンを見上げた。

「城に結界を張ってしまえば、

悪魔の力は城外に及ばない。

その後城に入れば、

わしらが何をしようとしているのか

悪魔に知れることはない。

この後からが大事な事だ。

お前さん達には

王子が悪魔の部屋に辿り着くまでの間、

悪魔の目を引き付けておいてほしい。

危険な事だが、それが出来るのは、

お前さん達二人しかない。

出来るかな？」

ガイアはカーラとエレンの顔を見合わせたが、  
答えはすぐに返ったきた。

大きく頷く二人に、  
ガイアはニツコリ笑い掛けると、  
部屋中の窓ガラスが振動するほど  
大きな声で叫んだ。

「いざ、悪魔討伐に！」

ドワーフ達は声をそろえて復唱し、  
勇んで家から飛び出していった。

「それじゃあ、姫さまのことをお願いします」

エレンは白雪姫の部屋の戸口で兵士に言った。

兵士はニツコリ笑って頷くと、

「気を付けてくださいね。」

白雪姫の事はご心配なく」

兵士は不安顔のエレンを励ますように言うと、  
何か思い出したように声を上げ、  
ワイシャツの胸ポケットから、  
細い皮紐が通された十字架を取り出した。

「これを持って行ってください。」

エレンさんのは白雪姫の首にありますから。  
あなたの物ほど高価な物ではありませんが、  
多少なりとも神のご加護があるでしょう」

そう言って兵士は

エレンの首に十字架を下げた。

「ありがとう・・・」

そういえば、あなたの名前、  
聞いていなかったわね？」

エレンは十字架を握り締め兵士を見上げた。

「私みたいな一兵の事など

気にする事はありません。

どうかご無事で・・・」

兵士は深々と頭を下げエレンを見送った。

丸い月が天上に差し掛り

闇の色が一段と濃くなった深夜、

ドワーフ達は城の城壁の影に

身をひそめていた。

「準備はいいな？」

「合点だ！」

囁くような会話の後、

子供ほどの小さな影は散り散りに別れた。

「第一班、準備完了！」

「第二班、準備完了！」

城門に戻ってきたドワーフたちは  
声を揃えてガイアに報告をする。

ガイアが右手を上げると、  
城のあちこちから煙が上がった。  
甘い眠気を誘うような煙は城中に広まり、  
すべての生き物を眠りにつかせた。

城を守るはずの  
兵士達は安らかな吐息をつきつつ、  
剣を投げ出してお休みタイムだ。

薬の効き目を確認した後、  
ドワーフ達は、再び別れた。

一人一人が、  
長い紐のような物を握っている。

魔を封じる世界樹の樹の皮で造ったロープで、  
城を一回りすると  
ドワーフたちは城の四隅に一人ずつ、  
裏門に一人、  
城門に一人、  
目を閉じて座り込んだ。

「森に住まう大地の精霊達よ、

しばし世界樹の皮に宿り、  
魔を封じる力を我に貸したまえ」

手を組んで呪文じみた言葉をガイアが叫ぶと、  
世界樹の樹の皮で出来たロープは  
ふわりと持ち上がり  
城を包む様にして中に浮いた。

『小賢しい真似を．．．』

突然、締め付けられるような衝撃を受け、  
妃の姿をした悪魔は声を上げた。

『大地の力を使われたのでは、  
私の魔法で城の連中を  
起こすことは出来ない。  
何処まで私の邪魔をすれば  
気がすむというのだドワーフどもは！』

悪魔は忌ま忌ましげに、  
目の前の窓ガラスを叩き割った。

『まあいい。  
結界を張っている間、  
ドワーフどもは動けない。  
カーラやエレンなど、恐るるに足らぬわ』

悪魔は城の周りで瞑想にふける

ドワーフを見下ろした。

『そこから見ているがいい王妃よ。  
カワイイ召使どもが殺される姿をな』

割れたガラスに映る王妃の姿を見詰め、  
悪魔は唇の端を釣り上げると、  
真っ赤な口で笑った。

「そろそろ時間かな？」

ガイアからもらった世界樹の葉を握り締め、  
王子は辺りを見回した。

皆、心安らかな吐息をたてて眠っている。

王子だけは、

世界樹の葉のおかげで眠らずにすんだのだ。

今朝送った手紙の返事には、  
カーラとエレンが城に入るまでは、  
むやみに動きまわるなと書かれていた。

王子の存在が悪魔にバレてしまつては、  
計画はすべて水の泡である。

王子は眠りこける兵士達に紛れて、  
事が起きるのをじっと待っていた。

その事は、ほどなくしてやってきた。

「こら悪魔！ この城から出ていきなさい」

言葉は勇ましいが、  
何とも情けない声が廊下の向こうから  
聞こえてきたのだ。

「戦闘開始だ」

王子は静かに立ち上がると、  
声が出た方向とは反対に向って走りだした。

## 対決

カーラとエレンは、  
手を取り合いながら、  
静まり返っている城内を見回した。

せっかく城に戻ってきたというのに、  
何の迎えもないなんて・・・。

「先生、聞こえていないんでしょうか？」

エレンは首に下げた十字架を握り締め、  
カーラを見た。

カーラは無言で首を振る。

「悪魔には、私達が見えているはずよ」

そういつてカーラは一步踏み出した。

『ようこそ、我が城へ』

突然響いた声にぎよつとして、  
カーラとエレンは足を止めた。

『王妃を助けたければ、  
部屋まで来るがいい。』

もっとも、こられたらの話だが・・・



挑発的な悪魔の声と共に、  
廊下がポーツと光を放ち、  
右手の窓ガラスがガタガタ音を立てた。

こんな、いかにも何かありそうな  
通路を歩くのは気が引けたが、  
悪魔はどうしても二人を  
こちら側に進ませたいらしい。

振り返ったエレンの目には、  
今入ってきた城扉も、  
反対側の通路も映らなかった。

扉と通路があつた場所が、  
壁にかわっている。

「どうして？」

エレンは悲鳴じみた声を上げたが、  
カールは彼女の手を引き歩きだした。

「王妃様の部屋に行く通路が  
消えてしまったんじゃないもの。  
良かったじゃない」

引きつり笑いを浮かべながらいったが、  
その足取りは頼りないものであった。

見慣れたはずの城内は、  
何処かしら不気味な雰囲気にも包まれていた。

しばらくは何事もなく、  
二人は歩を進めていた。

静かすぎるのが、  
かえって恐怖心を増す。

何の物音もしない廊下を、  
二人分の足音だけが鳴り響いていた。

こつこつこつ・・・。

規則正しく響く靴音に  
耳を傾けながら歩いていたカーラは、  
はっとして立ち止まった。

「どうかしたんですか？」

カーラの数歩先で  
エレンが不安そうな声を上げる。

「なんだか靴音が不自然な気がして・・・」

カーラは足元を見て声を上げた。

その声が悲鳴じみていたので、  
エレンが飛び上る。

「どうしたんですか！」

黙ったまま自分の足元を見詰めている  
カーラの傍らに、エレンは駆け寄った。

「脅かしっこなしよ」

エレンの言葉にカーラは足元を指差した。

「床がどうかしたんですか？」

カーラの指差す方に目を向けたが、  
なんら変わった所はない。

エレンが眉を寄せてカーラを見ると、

「靴音が聞こえてたわよね・・・」

カーラは、そろりと顔を上げてエレンを見た。

「はい」

エレンは考えもせず速答したが、  
カーラが言わんとしていた事実に気付き、  
頭から血の気が失せるのを感じた。

城内の廊下は、騒音防止のために、  
すべて厚手のジュータンが敷かれているのだ。

鉄の靴でも履いていないかぎり、

靴音なんてするはずはない・・・。

カーラはエレンの顔を見詰めると、  
ゆっくり振り返った。

廊下は長く続いていたが人影はない。

「先生・・・」

エレンは声をひそめてカーラの肩を叩いた。

カーラは生唾を飲み込むと

突然感じた強い視線に顔を上げた。

視線の先には窓ガラスがあった。

そこには外の景色が見えるはずである。

しかし違った。

ガラス面には不安顔で立ちすくんでいる  
カーラとエレンの姿が映り込んでいた。

そして二人の肩に  
猫くらいの黒い影が一つずつ  
乗っていたのだ。

始め外の木立か何かが  
重なって見えているのだと思った。

けれどもその考えは  
すぐに打ち消された。

肩に乗ったそれは、  
耳まで裂けた大きな口を開き、  
ニヤリと二人に笑いかけたのだ。

「きゃああああ！」

エレンの悲鳴と共に、  
今まで見えなかった黒い化物が姿を現した。

体のわりには、変に大きな頭部。

目は猫に似た金色で、  
真っ赤な口からは粘ついたよだれを流している。

レザーを思わせる表皮をした体の背中には  
蝙蝠の様な翼が生えており、  
細く長い足の間では  
蛇みたいなシツポが揺れている。

「いやあ！なにー！！」

エレンは身をよじって、  
肩に乗っている不気味な生き物を振り払った。

「これがガイアさんの言っていた  
使い魔なの？」

カーラはエレンに駆け寄り呟いた。

「なんですか、その使い魔ってというのは」

エレンは壁にはりつくくと、

中に浮ぶ、その使い魔なるものを

不安げに見上げた。

そいつらは踊るように、

小さな翼をはばたかせ、

舌なめずりをしながら二人を見下ろしていた。

どちらがどちらの人間を食べようかと、

相談中なのかもしれない。

エレンはぞっとして自分の肩を強く抱いた。

こんな気味の悪い奴に食われたんじゃ

成仏出来ない気がする！

泣きそうなエレンの前に立ち、

カーラはスカートのポケットから

小さな鏡を取り出した。

ガイアに渡された鏡である。

「悪魔を滅ぼすには、

この鏡を使って奴の本体を外

に引っ張り出さなくてはいけない」

鏡を手渡された時、  
ガイアはそういった。

そして白雪が眠りについた夜、  
カーラにこう言ったのだ。

「悪魔は使い魔という手下を数体連れている。

グレムリンという小悪魔だ。

力はないが狂暴で人を襲う。

もしそれに会ったら、

この鏡を向けてこう言うんだ。

『もとの世界にお帰り』と。

この時、重要な事がある。

疑ってはいけない。

鏡の力を信じるんだ。

少しでも疑う心があれば、

鏡は力を貸してくれないぞ……」

カーラの頭の中で、

ガイアの言葉が思い出された。

自分に出来るだろうか？

今まで超状現象のたぐいを

否定し続けてきた自分に……。

カーラは鏡を持ち直しグレムリンに向けた。

グレムリンたちは、

その鏡を見て一瞬怯んだが、

すぐにいやらしい笑みを浮べた。

その笑い顔から、

『こいつは信じていない。

こいつに俺達は倒せない』

という考えが感じとれた。

「先生どうかしててくださいよ。

ガイアさんから何か聞いているんでしょう？」

エレンはカーラを盾にして身をひそめた。

「そ、そんなこと言われたって・・・」

カーラが頼りない口調で言ったとき、

グレムリン達が急降下してきた。

「きゃああああ！」

二人は情けない声を上げつつ、  
辺りを走り回った。

グレムリンの方は

逃げ惑う二人を見るのが楽しいのか、

長い鋭い爪で彼女等の服や皮膚を

引っ掻きながら飛び回った。

元来、弱いものいじめが大好きな生き物なのだ。

あっさり殺さずに

苛め殺した拳句、食べるつもりなのだ。



「先生！」

少し離れてしまったエレンは、  
カーラのもとへ駆け寄った。

カーラは鏡を持ったまま、  
何か決心がつかない様子で  
グレムリンを追い払っている。

「早く、その鏡を使うんでしょ？」

エレンは引き裂かれたブラウスの袖を取ると、  
それを振り回してグレムリンを追っ払った。

しかし、そんなことは無駄な抵抗である。

鋭い爪の攻撃にかかり、  
ブラウスの袖はボロへと変貌を遂げた。

「先生！」

エレンはカーラの手にある鏡を奪うと、  
それをグレムリンに向けた。

グレムリン達の顔色が変わる。

「お前等、消えちゃえ！」

エレンの言葉と共に、

グレムリンは鏡に吸い込まれてしまった。

「なんで、呪文が違うのに」

カーラは気が抜けたように  
その場に座り込んだ。

「呪文なんかあったんですか？」

エレンは鏡をカーラに差し出した。

「ええ。」

でも、そんな事は関係ないのかも。  
疑わないことが、この鏡の力なんだわ」

カーラは鏡を受け取り溜め息をついた。

こんなに自分を悩ませた事を、  
エレンはあっさりやってのけた。

どうして見えもしないものを、  
この世のものではないものを  
信じる事が出来るのか・・・。

しかし目に見えた事実は  
柔軟に受けとめる事の出来るカーラは、  
このあと何匹も出てきた  
グレムリン達を鏡に封じることが出来た。

「この調子でガンガン行こうっっ!!」

エレンはボロボロにされた  
スカート裾をたくし上げ、  
勇ましく駆け出した。

王妃の部屋は、もうすぐそこだ。

『ほう、

あの教師が鏡の力を信じるとは  
意外な事だ。

この調子では、ここまで来ることが  
出来るかもしれないねえ。

まあいい、

王妃の目の前で殺してやるのも一興。

なんせ私に楯突いた人間どもだ。

ただでは殺さないよ』

窓ガラスの裏側で、

王妃はハラハラしながら

カーラとエレンを見詰めていた。

こんなに近くに居るのに、

何も出来ない自分かもどかしい。

「なんとか手を貸してあげたいけれど、

ここからでは何も出来ないわ」

貼りつくように

窓ガラスに身を寄せていた王妃は、

聞こえるはずのない人声に気付き振り返った。

城の者達は皆、眠っているはずだ。

人の声など．．．。

気のせいかと王妃は我が耳を疑ったが、  
囁くような小さな声が何処からか聞こえてくる。

自分が居る場所とは丁度反対側の通路から、  
その声は聞こえてきた。

「なんでしょう、これは．．．」

突然通路を塞ぐ様にして現われた壁を  
撫で回しながら、王子は困ったように呟いた。

エレンに書いてもらった城の見取り図通り、  
この回廊を真っすぐ進めば、  
王妃の部屋に付くはずだった。

それなのに通路を阻むこの壁は一体．．．。

「エレンさんの思い違いでしょうかね」

王子は壁を見詰めながら、うめき声を上げた。

ここが通れないのでは、  
他の通路に行くしかない。

しかし、  
城の内情を良く知らない王子にとっては、  
どの通路が何処に通じているのか、  
皆目見当もつかなかった。

しかも、この王子ときたら  
少々方向音痴な所がある。

やたらめったら城内を歩き廻り、  
ばったりカーラ達に会ってしまったら・・・。

「うーむ」

王子もそこところは心得ているらしい。

無駄に動き回らず腕を組んで、  
美しい柳眉を歪めるばかりだ。

その時、剣の表面がキラリと光った。

剣はこの城に入ってから、  
すっかりその姿を変えていた。

墨の様だった剣は、  
明るい光を取り戻していたのだ。

しかし不思議なことに、

鏡のように滑らかな剣の表面は、  
相変わらず何も映すことはなかった。

その剣が何かを反射したのだ。

王子は剣を持ちなおし、

反射が起こって光った角度に剣を傾けた。

その先には小さな通気孔があり、  
雨水が溜まっている。

どうやら月の光を受けて光っている  
その雨水の光を剣が反射しているようだ。

いままでどんな物も映さず、  
どんな光も反射させることがなかった剣が  
なぜ．．．。

王子は通気孔の穴に近付き、  
その雨水を覗き込んだ。

それはただの雨水であつたが、  
どこかから聞こえて来る細い声に  
王子辺りを見回した。

当然のことながら人影はない。

まさか悪魔に知られたのでは．．．。

不安な表情が王子の顔に浮んだとき、

反射を起こして光る剣の表面に  
美しい女の姿が現われた。

知らぬ顔ではなかった。

この城の王妃である。

数年前、年の離れた姉が他国に嫁いだ婚礼の日、  
式場で見かけた覚えがある。

しかし実際の記憶よりも、  
少々老けて見えたが  
その美しさに変わりはなかった。

「貴方はゴルゴ国の王子様ですね。  
なぜこんな所に」

王子は答えかねた。

これが本物の王妃であるという保障は  
どこにもない。

「御免なさい。  
驚くわよね、

こんな所から話かけられたのでは」

ふっと力なく笑った王妃の胸元に  
光る物を見て取り、

王子はこれが本物の王妃であることを確信した。

王妃の胸を飾っているのは、  
子供の手のひら程もある  
大きな口ザリオだったのだ。

「丁度いいところで会いました。  
私は悪魔を倒すためにここまで来たのです。  
しかし、ここに出来た壁のせいで  
先に進むことが出来なくて・・・」

「悪魔を倒す？ 何故その事を？」

王妃は両頬に手をあて叫んだ。

「まあ、成り行き上そうなったのですが・・・  
それより王妃様は  
こんなところで  
何をしていらっしゃるのですか？  
悪魔は・・・」

王子は言い掛け口を塞いだ。

王妃の考えは、  
悪魔に筒抜けなのではないか？

蒼白な表情になった王子の顔を見て  
王妃は何か感じたのか、

「悪魔のことは気になさらずに。  
今の悪魔はそれどころではないのです。  
私を助けようと城に戻ってきてくれた



侍女と娘の家庭教師の足止めに精一杯ですから」

王妃はニツコリ微笑んだ。

いつもは頭の奥で

重く感じる悪魔の気配が、

今は全くなかった。

「そうですね、うまくやっているようですね」

王子はホッと胸を撫で下ろした。

いくら二人組で、

ドワーフの魔法アイテムを持っていると

分かってはいても、

どちらも弱い女性である。

囿に使うのはどうかと考えていたが、  
しっかり任務遂行中らしい。

「あの二人より早く悪魔の所に行かなくては」

「エレンとカーラ先生をご存じなんですか？」

独り言のように呟く王子の言葉を

聞き逃さなかった王妃は、

剣の中で両手を組んだ。

「成り行きだと、言いましたでしょう？」

王子は剣の中から心配そうに見詰める王妃に  
微笑んだ。

「詳しい話は後にしましょう。

悪魔のいる所までの道順を

教えてもらえますか？」

「もちろん・・・

でも一つだけ聞いても

いいかしら？」

王妃は瞳を伏せて、小さな声で呟いた。

「白雪姫は無事ですよ」

邪魔して悪いけど。

とでも言いたげに、

申し分けなさそうな王妃に、

王子は笑い掛けた。

天使も逃げ出してしまいそうな、

極上の笑みで。

先程まで美しく輝いていた月が、  
黒雲に姿を隠された時、

兵士は椅子から立ち上がった。

風は穏やかに吹いていたが、  
梢を揺らす木々の音は、  
何処かしら不安な気持ちをかきたてる。

「嫌な雲行きだ」

部屋に流れ込んできた、  
妙に湿った空気に兵士は眩くと  
部屋の窓を締め切った。

白雪は、まだ眠ったままだ。

兵士は大きく息を付き、  
白雪の枕元に椅子を移動すると、  
そこに座りなおした。

まるで蠟細工の様に沈黙を続けている  
白雪の顔を見詰めて、  
兵士は彼女の口元に耳を寄せた。

先程から、何度も続けている行為だった。

死んでいるんじゃないだろうか？

しかし白雪の愛らしい唇からは、  
糸のように細く、  
空気は出入りしているようである。

白いシートが掛けられた胸元も、  
微かだが上下している。

「生きてるよな」

兵士が言聞かせるように呟いたとき、  
今まで沈黙を決め込んでいた白雪の体が、  
寝返りを打った。

突然の変化にビクリとした兵士は立ち上がり、  
何か恐ろしい者でも見るように  
白雪を見下ろした。

不安げに見守る兵士を横に、  
白雪は盛んに寝返りを打ち続けた。

ごろんごろんごろん．．．ごろん！

最後のごろんは大きかった。

勢い余ってベッドから落ちそうになった  
白雪の体を、慌てて兵士が抱き留めた時、  
耳をつんざくような高い音が鳴り響いた。

それが、白雪の体に入った  
悪魔の毒気を抜くために使われていた、  
鏡が割れた音だと兵士が気付くまで、  
多少の時間を要した。

あまりに激しい高音だったため、

兵士の鼓膜はしばらく使いものにならなくなり、  
それどころではなかったからだ。

そして、回復した兵士の耳が、

一番に聞いた言葉は、

白雪の寝呆けた「おはよう」だったのだ。

割れた鏡は木の葉の様に部屋中を舞い、  
床に積もると、やがて溶けてなくなった。

## 悪魔を切る剣

王妃の部屋の前に付いたとき、

エレンとカーラは同じ事を考えていた。

王子はもう、中にいるだろうか？

それにしても静かすぎる。

ひよつとしたら方向音痴が発生して、

城を彷徨っているのでは・・・？

この考えはカーラだ。

しかし、口には出来ない。

口に出したら王子の存在を、

悪魔に知らせることになる。

かといって、

いつまでもこんな所に立っていたら、

悪魔の方だっておかしいと思うはずである。

中に入らなくては・・・。

エレンとカーラは恋人達のように

見詰め合うと、

観音開きの立派な扉を仲良く押し開いた。

『ようこそ、我が城へ』

部屋の奥、呪願鏡の前で、  
王妃がニツコリ微笑んだ。

外見は王妃そのものだが、  
彼女が立っている場所だけ、  
妙に闇が深かった。

『ドワーフの力を借りて、

ここまでは辿り着けたようだが、  
この先どうする？

そんなちっぽけな鏡では、

私を殺すことは出来ないよ。

なんせ私は不死身だからねえ』

王妃はふくよかな胸を張って高笑いをした。

本物の王妃様だったら、

こんな下品な笑い方は絶対にしないわ！

エレンは避難がましく悪魔を睨んだ。

『お前達は邪魔者なんだよ。

ここで死んでくれるかい？』

悪魔は二人を睨み付けると、  
白く細い手を中に掲げた。

『結界の中では、

私は魔法を使えないと  
ドワーフどもに言われてきたんだらうけど、  
全く使えない訳ではないんだよ。  
カワイイ下部の餌になるがいい！」

悪魔の声が部屋中に響いたと同時に、  
呪願鏡の中から、  
たくさんグレムリンが飛び出した。

「こいつらをけしかけたって、  
無駄だと分かっているんでしょ?!」

カーラは鏡を構えたが、  
悪魔は牙でも見えるんじゃないかと  
思えるほどに邪悪な笑みを浮べた。

『分かっているぞ。  
しかし、これを見たらどう思うかな?』

悪魔は呪願鏡の横に立ち、  
その表面を撫でた。

いままでは真っ黒な状態だった鏡は  
鈍く光りだし、  
部屋の中を映し出した。

『ほほほ、よく見るがいい。  
自分たちの仲間を殺すのかい?』

悪魔はさも楽しげに、



手の甲を口元にあてて高笑いだ。

鏡の中には、エレンとカーラ。

そして、それを取り巻くように、  
城で働く使用人達の姿が映っていた。

慌てて鏡から視線を移したが、  
そこに居るのは

醜いグレムリンの群れである。

「こいつら城内の使用人達なの!？」

エレンは悲鳴を上げた。

『殺すも殺さないも、  
お前達の良心次第だね』

「冗談じゃないわよ。  
どうしよう先生!」

エレンはカーラの袖を引っ張り、  
泣きそうな表情で叫んだ。

けれども泣きたいのはカーラも同じだ。

そんな二人の気持ちも知らずに、  
グレムリン達は襲いかかる。

「とりあえず・・・」

カーラは、  
にじり寄るグレムリン達を睨み上げ  
後じさると、

「逃げましょう！」

クルリと背を向け走りだす。

とにかく王子がいないことには話にならない。

逃げ回っている間に、

王子が悪魔の所に辿り着いてくれれば  
良いのだから。

『逃げられやしないよ』

悪魔の声が追ってくるように響いたが、  
振り返る余裕もなかった。

グレムリンの爪を払いながら、  
今来た廊下を走り回る。

「こいつらが城の人達だとしたら、

さつき鏡に封じた奴らは何だったの？」

エレンが不安そうに声を上げたが、  
そんなこと考えたくもない。

さっきのグレムリン達も  
城の者達だったなんて・・・。

カーラは首を振った。

「どうしようどうしよう!」

エレンは壊れたレコードのように  
同じ言葉を繰り返していたが、  
とにかく逃げよう。

今はそれしか出来ない。

「はぁーいつ!」

城門の前で結界を張っていた  
ガイアの肩が叩かれたのは、  
エレンとカーラが城外を  
逃げ回っているときの事だった。

「白雪姫・・・」

ガイアは結界の手を緩めずに、  
微笑みながら自分を見下ろす白雪を見た。

「手筈はどうか、ガイアさん?」

白雪は城の方を見た。

やけに静かである。

しかし静かに見えるが、  
中ではエレンとカーラが大騒ぎである。

そして王子も悪魔の部屋に  
辿り着きつつあった。

「すみません。」

どうしても行くってきかなくて・・・」

白雪を連れてきた兵士は  
面目なさそうに頭を掻く。

「まあ邪魔にはならんだろう。  
むしろ好都合かもしれないぞ」

ドワーフの意外な言葉に、  
兵士は首を傾げた。

「毒気が抜けた今の白雪姫の行動は、  
悪魔には判らない。」

エレンとカーラだけでは  
心もとなく思っていたところだ。

あんな、白雪姫と悪魔の所へ  
行ってくれないか？」

少し遠回りをして、

王妃の部屋に向っている王子は、なるべく窓の前を歩かないようにしていた。

いくら悪魔の気が逸れていると言ったって、いつこつちに気が廻ってくるかしれない。

外に面した通路から、

中通路に入った王子は安堵の息を着いた。

迷うことなくついた。

王妃には口で聞いただけだったが、カーラの心配を他所に王子は無事に悪魔のところまで来る事が出来た。

王妃は部屋への道順だけ言うと、すぐに姿を消した。

長話しをしている間に、

悪魔に気付かれるかも知れないと思っただからだろう。

今頃はエレンとカーラの所にいるはずだ。

「ひー、どうするんですか、先生！」

回廊の角に追い詰められた二人は、  
悲鳴を上げるしかなかった。

『さよなら』

悪魔の嬉々とした声が響いた時、

ドシュン！！

鋭い音がしてグレムリンの一匹が床に落ちる。

グレムリンの心臓を一本の矢が射抜いていた。

次々に飛んでくる矢は

正確にグレムリン達の心臓を貫き

彼等の命を奪っていく。

「大丈夫だった？」

目を丸くしてグレムリンの死体を見詰める  
エレンとカーラに心配そうな声を掛けたのは、  
聞き慣れた白雪の声だった。

矢を放ったのは白雪と共にいる兵士だ。

恐ろしいほど良い腕をしている・・・。

「何てことするんですか！」

駆け寄ってきた白雪と兵士に、  
エレンが怒鳴り付けた。

「何よう、せつかく助けてあげたのに！」

白雪はブーたれてエレンを見上げる。

「このグレムリン、  
城の使用人達が  
姿を変えられていたものだったのに！」

カーラはその場に膝をついて呻いた。

「ええええええ！　これが？」

カーラの言葉に白雪は叫ぶと、  
グレムリンの死骸を手を取った。

「城にこんな使用人なんていたかしら？」

白雪は眉を寄せて首を傾げる。

「だから姿を変えられたって・・・」

言い掛けてカーラは言葉を飲んだ。

白雪がカーラの前に突き出した物は  
グレムリンの死骸などではなく、  
ボロボロの濡れ雑巾だったのだ。

カーラは慌てて床に目を向けたが、  
そこに転がっているのは  
バケツやらホウキやら．．．。

「騙されたー！」

きーっと叫ぶカーラの隣で  
エレンがうなだれた。

「掃除用具相手に、  
何悲鳴上げてるのかと思ったわよ！」

白雪は腰に両手をあて、  
呆れたように呟いた。

「よほど恐いものに見えたんでしょうね」

兵士はフォローするように言うと、  
放心状態の二人を見下ろした。

『とんだ邪魔が入ったものだよ。  
もう手のこんだことはやめだ。  
白雪だけいたでいていくよ』

回廊の窓ガラスがガタガタと音を立て、  
次第にその音を高めていく。



白雪達は窓から離れた壁に  
団子状に固まっていた。

「どっしょっしょ」

カーラはガイアからもらった  
鏡を見詰め呟いた。

もう王子が王妃の部屋についても  
おかしくない頃だ。

しかし、どうやってそこまで行こう・・・。

深刻に悩んでいるカーラを尻目に、  
白雪は兵士と一緒に平気な顔で歩きだした。

窓ガラスは怪しげに音を  
立てているというのに・・・。

「ひひ、姫様!?!」

エレンは両手を伸ばして  
白雪を捕まえようとしたが、  
白雪はひらりと身をかわし、

「エレンと先生、なんか変よ?  
何をそんなに怖がってるの?!」

キレイな柳眉を寄せて細い腰に両手を当てる。

兵士は気の毒そうに  
エレンとカーラを見下ろした。

「白雪姫、二人には  
まだ呪願鏡の力が働いているんですよ。  
だから掃除用具がお化けに見えたり．．．  
きつと今も何か見えるんでしょう？」

兵士は弓を持ち直し辺りを見回した。

人気のない回廊は  
不気味なほど静まり返っている。

「何かつて．．．  
白雪姫だけいただいて行くなって声が．．．」

カーラは揺れる窓ガラスを凝視しながら  
呟いた。

この騒動が判らないなんて．．．。

「そんなの聞こえた？」

呑気な口調で聞く白雪に兵士は首を振った。

「とにかくエレンさん達に見えているものは、  
すべて幻覚です。

ガイアさんが言っていました。  
結界の中にある悪魔は、

呪願鏡に姿を映した者にしか  
幻覚を見せられないって。

だから私と白雪姫は何ともないんですよ。  
城はいたって静かなものです。

悪魔などに惑わされずに

早く王妃様の部屋に参りましょう」

へっぴり腰のエレンとカーラを引っ張って、  
白雪と兵士は回廊を歩きだした。

途中エレンが悲鳴を上げ  
カーラが鏡を構えたが、

「何でもない何でもない」

両手を振って面倒くさそうに言う  
白雪の言葉に、

現れた恐ろしい幻覚はすべて消されていった。

きゃあきゃああ叫ぶエレンとカーラを連れて  
白雪の一行が王妃の部屋に着いたとき、  
部屋の前では王子が寝たふりをしていた。

王子が部屋の前で待っているのと、  
複数のお話し声が聞こえてきたので  
機転をきかせたらしい。

しかしカーラは、そう思わなかった。

「ドジ踏んで眠ってる!」

真っ青な顔で眉を歪めている。

しかし不安はすぐに打ち消された。

王子は寝返りを打つふりをして、  
ウィンクしてきたのだ。

ほーっと息を着いたカーラは、  
扉に手を掛け、

「開けるわよ．．．」

蚊の鳴くような小さな声で同意を待った。

皆、深刻な顔で頷く。

ギギイイイイ．．．．．。

扉の蝶番がきしんで気味の悪い音を立てた。

扉が開いたと同時に、

部屋の中から真っ黒な煙のような物が流れ出る。

空気より重い物なのか、

足にまとわり着くように流れてくるのだ。

先程カーラとエレンが来た時には、

こんなものはなかった。

「なんか黒い蛇が束になって  
這ってくるように見える」

そうカーラが思ったが同時  
エレンが悲鳴を上げた。

「きゃああ。私、蛇は駄目ー！」

バタバタと足で床を蹴りつける。

「また変なものに見えるのね」

半ば呆れたように白雪は呟いたが、  
突然隣に立っていたカーラに抱きつかれ、  
つい悲鳴を上げてしまった。

「何するんですか先生!？」

白雪はバクバク鳴る心臓を静めようと、  
変に大きな声で聞いた。

「・・・もう駄目、後はお願いね・・・」

カーラは目を見開いて  
床の一点を凝視していたが、  
白雪が視線をそこに移しても、  
やっぱり何も見えなかった。

カーラはポケットから鏡を取出し、  
半ば強引に白雪の手に持たせるが同時、  
大きな悲鳴を上げつつ  
部屋から飛び出していった。

「待つてください先生！

私もこの部屋にいたくないー！！」

逃げるように駆け出していったカーラの後を  
エレンが慌てて追いかける。

『ほほほ。やはり呪願鏡の呪いを受けた者が  
この部屋に長居することは辛いようだね。

この世の物ではないものが、  
たくさん見えただろうに。

ほーほほほ』

部屋の奥から高飛車な笑い声が響き、  
その主が姿を現した。

「お母様・・・」

白雪は黒いドレスの裾音を立てながら  
歩んできた者の姿を認め呟いた。

何処から見ても自分の母親に違いないのだが、  
血のように赤く輝く瞳は、  
もはや人間のものではなかった。

「お母様を返してー！」

白雪は数メートル先まで迫った  
悪魔を睨み付けた。

『まったく、ドワーフどもは  
余計なことをしてくれたものだね。  
せっかく白雪の体を  
私に近い物に変えたっていうのに!』

悪魔は白雪に答えず、  
いまいましげに爪を噛んだ。

ギリギリと音を立てて  
噛みちぎられた爪は、  
赤く細い糸を引きつつ床に落ちた。

『まあいい。

どの道お前は  
私の物になるのだから・・・』

「魔法も使えないくせによく言うわ。  
お母様を返して!」

白雪は声を荒げて叫ぶと  
ガイアからもらった鏡を掲げた。

鏡から放たれた光が  
部屋中を照らしだす。

すべての反射物に光が集まり、

くつきりとその一つ一つの形を浮かび上がらせた。

美しく光のシルエットを浮べる物の中、  
一つだけ黒い影を落としている物がある。

銀製の水差しだ。

魔を払う銀に宿るその影は、  
紛れもない白雪の母、王妃だ。

不安そうな表情で、  
こちらを見詰めているようだ。

「お母様！」

白雪は走りだし掛けたが兵士に手を掴まれた。

その銀の水差しは  
大きな鏡の前に置いてあったのだ。

呪願鏡。

兵士はそれを見たことがなかったが、  
そうだと確信した。

白雪が手にした鏡からは、  
いまだまばゆい光が溢れていたにもかかわらず、  
その鏡は何も映さずに、  
ただ闇色に静まっていたからだ。



呪願鏡の前に立つては元の木阿弥だ

「卑怯よ、

お母様を呪願鏡の前にある物に  
閉じこめるなんて！」

白雪は地団駄踏んで身悶えたが、

「白雪姫それは違います。

悪魔は銀には触れられないはずです。

案外銀の水差しの中に入られて

困っていたんじゃないですか。

ねえ？」

兵士は悪魔に視線を移し、

挑発的に言つと弓を構えた。

『馬鹿者め。

普通の武器が私に通用するとても

思っているのかい？』

悪魔は弓を大きく絞る兵士に笑い掛けた。

真っ赤な口元からは刺の様に鋭い牙が覗く。

「思っていないですよ。

でもこれはドワーフさんからいただいた  
武器ですから」

兵士は顔色一つ変えずに答えると矢を放った。

『ひっ！』

悲鳴を上げて悪魔は身を翻したが、  
兵士の獲物は彼女ではなかった。

矢は真つすぐ進み、  
寸分の違いなく銀の水差しに突き刺さった。

金属をも貫く鋭い矢の矢尻には、  
細い紐が結び付けられていた。

その先は矢を射った兵士のもとに続いている。

「私の役目は、  
王妃様をお前から遠ざける事だよ」

兵士はそういつて思い切り紐を引っ張った。

その先の水差しは綿花の様に舞い上がると、  
風に舞う木の葉のごとく優雅な動きで  
白雪の手に渡った。

「お母様！」

白雪は水差しに頬摺りした。

その中で王妃が何か喋っているようなのだが、  
何を話しているのか全く聞こえない。

『脅かすんじゃないよ!』

悪魔は目をむいて兵士に怒鳴ったが、  
いつのまにか増えていた人物に気付き声を上げた。

『誰だのお前は?』

服はこの城の兵服だが．．．』

悪魔は場違いな笑みを浮べてながら、  
自分を見詰めている王子に声を掛けた。

「初めてお目にかかります。

私、隣国の者です。

父上から変わった物をいただいて

おりますて…」

王子は笑顔を絶やさずに剣を構えた。

途端に悪魔の顔色が変わる。

血のように赤かった唇は薄紫色に変わり、  
透き通るように白い肌は蠟のように固まった。

『な、何故それがここに．．．

貴様、ゴルゴ城の者だな。

王子か?

何故こんな所に!』

悪魔はヨロヨロと後退すると、  
乾いた唇からひび割れた声を上げた。

「それはもちろん、

貴方を倒すためですよ。

今度こそ、本当に」

王子は早口に言つと床を蹴った。

悪魔は倒れるように呪願鏡の前に駆け寄ると、その表面に手を当てた。

開いて重ねた掌から

煙のような筋が流れだすと、

それは鏡に吸い込まれる様にして消えていく。

と同時に

王妃の体が大きく後に倒れてきた。

「危ない！」

兵士が叫んだが

王妃の体は王子に抱きとめられた。

王子は王妃の体を床に横たえると

鏡に向き直る。

しかし、その中に

悪魔の姿を見付けることは出来なかった。

王子は剣を振り上げ、

滑らかな鏡面目掛けて振り下ろした。

鏡は悲鳴のような音を立てると、  
バラバラ床に落ちた。

粉々に砕けた鏡の欠片は何も映すことなく  
氷のように溶けて無くなった。

「大丈夫ですか？」

駆け寄ってきた兵士が王子に話し掛ける。

王子は頷くと王妃を見下ろした。

悪魔の抜けた王妃の体は沈黙を続けていたが、  
白雪の持っている銀の水差しを  
その胸にかざすと、  
ゆっくり目を開いた。

「良かった、お母様！」

白雪が飛び付くと

王妃は彼女を優しく抱き締め涙を流した。

「一軒落着ですか？」

兵士が呟いたが王子は首を振る。

「悪魔はまだ城内にいるはずですよ」



最後…

「きゃあああ。もう嫌ーーーーー!!」

王妃の部屋を出てから今まで、  
ひたすら逃げ回っていたカーラとエレンは、  
またしても行き止まりのピンチに陥っていた。

「こんなことなら、

王妃様の部屋に残ってたほうが  
良かったんじゃないんですか」

エレンが責めるように

カーラの袖を引っ張ったが、

「冗談じゃないわよ。

あんな地獄絵みみたいな部屋の中に、  
一分一秒でもいられるもんですか!」

カーラは先程の王妃の部屋の状況を思い出し、  
吐き気を催した。

王妃の部屋の中は、まさに地獄だった。

そこには魑魅魍魎が蠢き、

城内の使用人たちを

頭からバリバリと喰っている姿があった。

そして足に絡まり着くように流れてきた煙は

大蛇となり二人に襲いかかったのだ。

「でもここで蛇に喰われるなら同じですー!」

エレンは悲鳴を上げて、

道中手に入れた掃除モップを振り回した。

「そんなことないわ、

これは幻覚なのよ。

白雪姫と兵士が言ってたじゃない。

この幻覚は払えるかもしれないけど、

あの部屋に長くいたら狂ってるわよ!

間違いなく!」

カーラはホウキを振り上げ大蛇に叩きつけた。

跳ね返される衝撃は、

とても幻覚とは思えない。

「やっぱり本物かもしれない!」

カーラはホウキを抱きしめ

観念したように叫んだ。

「もう駄目、私達ここで死ぬんだわ・・・」

エレンは血走った目で大蛇を睨み上げ呟く。

「不吉なこと言わないでよ!」



カーラはエレンを睨んだが、

「先生、ジ・エンドよ」

エレンは、ぎゅっと両目を閉じた。

大蛇が大口を開いて飛び掛かってきたのだ。

「きゃあああああ．．．．．あ？」

迫り来る大蛇の口内目掛けて

叫んだカーラだったが、

その悲鳴は突如、

拍子抜けしたように間の抜けた声に変わった。

その声のエレンが顔を上げる。

大蛇の姿は忽然と消えていたのだ。

「ひよっとして王子様が、

悪魔をやっつけたのかしら？」

エレンは息をついて床に座り込み呟く。

しかし、カーラは返事をしない。

「先生？」

エレンはカーラの視線の先に目を向け、ぎよっとした。

真っ黒い窓ガラスの中に、  
血のように真っ赤な目をした  
美しい女が映っていたのだ。

「だ、誰ですか、あの女」

エレンは呟くように言ったが、  
カーラの答えを待つまでもなく、  
その正体は想像できていた。

悪魔だ．．．。

「ひいー!」

エレンは悲鳴を上げると  
カーラの後に廻り込んだ。

どうしてこんな所に悪魔がいるんだ？  
王子はどうしたんだ？

とでも言いたげな表情で  
エレンはカーラを見上げたが、  
カーラの方もエレンと同じ表情をしている。

「．．．なによ．．．」

カーラは思い切り凄んでみせたが、

足はガクガク揺れている。

悪魔は王妃の部屋に向けていた神経をカーラに移すと、にやりと気味の悪い笑みを浮かべて窓から出てきた。

しかし王妃の体をなくした悪魔は実体がないので、カーラの目の前に迫ってきた体は水のように透明だった。

たった今出てきたばかりの窓にある枠が、悪魔の体を通して透けて見える。

「うひゃあ！」

カーラの後ろでエレンが身を固くしたが、悪魔の感心はカーラの方にあるようだ。

蛇のように身をくねらせて彼女の前に立つ。

カーラは悪魔を睨み付けると、恐怖心を打ち払うように頭を振った。

しかし、そんなことは気休めにしかならない。

王子はどうしたんだろう？

悪魔が王妃の姿をしていないのだから、  
作戦は上手くいったのだろうか？

それなら、今日の前にいる  
こいつは何なんだろう……。

カーラはチラリと  
廊下の先に視線を走らせたが、  
寝静まっている城内は静かなものだ。

『お前さえこの城に来なければ、  
計画はうまくいったはずなのに……  
何年もかけて綿密に企んできた計画を……』

悪魔は忌ま忌ましげに言ったが  
言葉の意味とは裏腹に、  
口調は変に嬉々としている。

まさか失敗ったのでは！？

カーラは不安になり、  
もう一度廊下の先に視線を移した。

相変わらず静寂が続いている。

『ほほほ。』

誰を待っているんだい？

あの王子か『

悪魔の言葉にカーラはギョツとした。

「失敗したんだわ！」

カーラの後でエレンが悲鳴のような声を上げる。

『白雪は、もういい。』

とりあえずの体さえあればね。

お前も美しい・・・。』

悪魔は牙を向いてカーラに飛び掛かったが、寸でのところで手が届かない。

『何だ？』

悪魔は振り返り声を上げた。

窓ガラスの表面から細い光り状の紐が伸び出て、蜘蛛の糸のように幾重にも連なりながら悪魔の体をとらえていたのだ。

『何だ、この糸は!?!』

答えは待つまでもなかった。

蜘蛛の糸は見る間に悪魔を縛り上げると、その体を窓の方に向けて引きずりだした。

『や、やめる!』

悪魔は身悶えたが蜘蛛の糸の呪縛は解けない。

悪魔の体が窓ガラスの表面と重なった時、

「今よ、王子様！」

白雪の叫びに似た声が

窓ガラスを通して響いた。

銀色の光が閃き、

野外の闇を映していたガラスは

明るい色に変わった。

その中には

カーラから受け取った鏡を構えた白雪と、

剣を振り上げている王子の姿が映っている。

その姿を見るより早く、

澄んだ音を立ててガラスが割れた。

『ぎゃああああー！』

耳をつんざくような悪魔の声は、

城中に響き渡った。

割れたガラスの破片は床に落ちることなく、  
すべて悪魔の体に刺さった。

否、ガラスは割れてなどいなかった。

ガラスのように見えた光が鋭い刃となって、  
悪魔に突き刺さったのだ。

その光を放ったのは王子の剣である。

悪魔殺しの剣。

それは使命をまっとうすると、  
またもとのように漆黒の剣に姿を変えた。

『おのれ、お前たち覚えていろ、私は死なん。  
何度でも蘇り新しい体を手に入れてやる。  
私は不死身だ！』

悪魔は陽炎のように希薄になった姿で  
呪いの言葉を吐くと、  
悲鳴を笑い声に変えた。

「何言ってるの。  
呪願鏡は割れちゃったのよ？」

呆れたように白雪が言ったが、  
悪魔は笑い声をやめない。

『そんなもの、また作ればいいさ。  
教えてやろう。』

マーク村で土砂崩れがあった時、  
呪願鏡は割れた。

しかし、私が長い時間をかけて修復したのだ。

私の魂が生き続けている限り、  
呪願鏡も壊れることがないのさ。  
しかも私は不老不死。

お前等、末代までも呪ってやるっ！』

悪魔の瞳がルビー色に輝いた。

「そうはいきません。

貴方にはここで死んでもらいます。

本当の意味で・・・」

ガラスの中にいる王子は、

消えそうな状態の悪魔にきっぱりと言い切った。

『何度も同じ事を言わせるんじゃないよ。

私は死なない。

現に一〇〇年前、その剣で刺された私は、

こうして今の世に蘇っている・・・』

悪魔は声高らかに笑うと、

呪いを暗示するように王子を睨み付けた。

『復讐してやる。必ずだ』

「それでは困るのです」

王子は漆黒の剣を振り上げ、

大きく振り下ろした。

その剣は、



もうほとんど空気と同化していた  
悪魔の姿を真つ二つに裂き、  
塵のように飛ばした。

落雷に似た轟音と  
絹を裂くような女の悲鳴が同時にあがる。

悪魔の悲鳴ではなかった。

悪魔と契約を交わした  
哀れな一人の女の悲鳴だ……。

王子の振り下ろした剣のもと、  
悪魔との契約は破棄されたのだ。

「悪魔のとどめは、この黒い剣でなければ。  
貴方と悪魔の契約を断ち切るために」

『……なんとこの事だ。

私は死ぬのか……？』

悪魔の姿はもう何処にもなかったが、  
苦しげな声だけは聞こえてきた。

聞こえてくる、と言うよりは、  
その場にいた者達全員の意識中に  
語りかけてきているような感じだ。

「悪魔殺しの剣は

悪魔一体につき一本だけしか存在しません。  
そして本当に

悪魔を滅ぼすことが出来たときは・・・」

王子の手の中で

剣は煙のように姿を消していった。

「村を土砂で潰したのは貴方ですね？」

「一〇〇年前、貴方は最後の力を使って、

とどめを刺されるのを回避したのですね？」

『・・・・・・・・・・』

王子の質問の答えは生涯、

誰も知ることはなかった・・・。

おしまい

早朝の森の中を、  
二頭の馬が仲良く並んで歩いていた。

馬上の二人は？ と言つと・・・。

「ねえ王子様」

「何ですか？」

王子はお得意の笑顔でカーラを見た。

「どうして悪魔にとどめを刺すのは、  
黒い時の剣だつて知つたの？」

カーラは眉を寄せて王子に聞いた。

王子は軽く微笑むと、

「剣がキレイな状態の時、  
剣の刃の部分を見ませんでしたか？」

王子の言葉にカーラは首を振つた。

「そこに彫つてあつたんですよ。  
悪魔の姿を切るのは光の剣、  
つまりキレイな状態の剣で、  
悪魔との契約を断ち切るのは闇の剣、  
黒い状態の剣だと。」

ガイアさんにも聞いてましたし」

「なーんだ」

何とも単純な真相に、

カーラは拍子抜けしたように叫んだ。

もっとう、

とんでもない苦労の未発見した事実だと、

勝手に想像していたカーラは、

何となく気落ちしてしまった。

「悪魔と契約を交わした者は、

その契約を破棄しないことには

永遠に滅ばせないそうです。

それより、もうここまででいいですよ」

王子はアレフ城を振り返って見た。

もうだいぶ遠くなってしまった城は、

朝日を受けて白く煙って見えたが、

昨夜のことがまるで嘘のように静寂を保っている。

「駄目よ。王子様は方向音痴なんだから。

どこかとんでもないところに行かれたら

困るもの。

この国で行方不明なんかになったら、

迷惑するのはこっちなんですからね。

へたしたら戦争よ。分かる？」

カーラは人差し指で王子の胸元を押すと、馬の腹を蹴り走り出した。

どうやら前よりは、

穏やかな空気が流れているようである。

エレンと兵士は王妃に言い付けられて、ガイア達を家まで送っていった。

もちろん、お礼の品々をたくさん持って。

そのお礼の品とはドワーフ達の好物、葡萄酒である。

ドワーフの家に着き、荷馬車から兵士が葡萄酒の樽を下ろすとガイアがお茶をすすめてくれた。

エレンはそれに応じたが、

兵士は樽を地下の貯蔵庫まで入れなければいけないと言い辞退した。

本当はドワーフ達が好んで飲む

ハーブティーの味が、

好きになれなかったのである。

しかし、そんな心配は必要なかった。

その日ガイアが入れたお茶は、  
ただの紅茶だったのだ。

「別れる前に

一つだけ聞いておきたいことが  
あるんですけど？」

エレンは出された紅茶を飲みながら、  
向かい側に座っているガイアを見た。

ガイアはポットから新しいお茶を  
自分のカップに注ぎ入れると、  
ハーブクッキーに手を伸ばす。

「森の中にある、あの林檎の木。

あの実を取りにいった時、

一つだけしか取っっちゃ駄目だって  
言いましたよね。

どうしてなんですか？」

エレンは窓の外に視線を移した。

あんな大木なのだから、

天辺の先っちょくらい見えてもよさそうなのに、

視界に入る限りの木々たちは、

みな切り揃えられたように

飛び出した所が一つもない。

「聞きたいかい？」

ガイアはクツキーを頬張りながら、  
エレンを見上げる。

「考えだしたら気になって」

エレンは大きく息を着いたが、

「ならば何故、

林檎を取りにいった夜に聞かなかったのだ？」

ガイアは首を傾げた。

「その時はそんなこと疑問に思う暇なんて  
なかったし・・・」

「ならばずっと忘れていたら良いものを・・・」

ガイアは紅茶をすすりながら小声で呟く。

「・・・そんな恐い意味でもあるんですか？」

渋いガイアの表情を見てエレンは声を落とす。

「人間、知らないほうが幸せと言う事もある」

ガイアは両腕を組み、  
もつともらしく頷いて見せたが、  
エレンの気は収まらない。

「そんな言いかたされたら夜も眠れません！」

エレンは頭を抱え込んで  
テーブルに顔を伏せた。

ガイアは軽く咳払いすると、

「必要以上に林檎を持ち出した者は・・・」

「持ち出した者は？」

エレンは生唾を飲み込んだ。

「神の罰が当たり、

蛇になってしまっんだー！！」

「えー！！！！」

エレンは椅子から立ち上がり悲鳴を上げた。

「なんでそんな大切な事、

その時に言ってくれなかつたんですか！」

エレンはガイアに詰め寄り、

噛み付かんばかりの勢いで叫んだ。

「それを教えたら、あの木に林檎は実らない。

その者の真意を知るためだな」

ガイアはニツコリ笑い人差し指を立てた。



その指はエレンに、がっしりと掴まれた。

「じゃあもし私がまかり間違つて  
林檎を二つ取ってしまった場合は  
どうするつもりだったんですか？」

震える声でエレンはガイアを見た。

ガイアはばつが悪そうに  
視線を明後日の方に向けると、

「かわりはいくらでもいたらろう？」

腰を浮かせて呟く。

「私ってば当て駒だったんですかー！」

掴みかからんばかりの勢いで  
エレンはガイアに怒鳴り付けたが、  
ガイアはブンブンと首を振った。

「違う違う。」

一番欲がなさそうに見えたからだ

「本当に？」

エレンは探るようにガイアを見詰めた。

「本当だ。」

それに一番、木登りが得意そうに見えたし！」

ガイアはポンと両手を叩く。

「それ褒め言葉じゃありませんよ」

エレンは溜め息混じりに言つと  
椅子に座り直つた。

「でもまあいいわ。

貴方達のおかげで助かったのは事実ですもの。  
どうもありがとうございます」

エレンはお茶を一口すすると  
ガイアに頭を下げた。

「そろそろ戻りましょうか？」

扉が開いて兵士が顔を覗かせた。

エレンは兵士の顔を見ると、  
また何か思い出したように声を上げた。

「もう何も隠し事などしておらんぞ」

ガイアは逃げ腰になってエレンに言つ。

「ガイアさんの事じゃないわ。あなた！」

エレンは兵士を指差した。

「私ですか？」

兵士は首を傾げる。

「あなた、なんて名前なんですか！」

エレンは怒ったように兵士に聞く。

兵士は扉の後に隠れるように後じ去ると、

「別に私の名前に深い意味など……」

扉の影で呟く。

「意味とかそういう事じゃなくて！」

「聞きたいですか？」

兵士は思わせぶりにエレンを見た。

エレンが頷くと、

「実は私は隣国の密偵で……」

これ以上はちょっとお答えできません」

兵士はゴニョゴニョと言葉を濁す。

「はあっ？ って事はあなたスパイ？」

エレンは立ち上がって、兵士を睨み付けた。

「いえ、詳しいことは言えないのですが、  
分かりやすく言ってしまうえば  
王子様の護衛ですかね？」

「護衛って……」

まさか悪魔退治は

偶然巻き込まれた事じゃなくて……」

「そ、それ以上はっ！！」

兵士は悲鳴のような声を上げて、  
部屋から逃げ出した。

「ちょっと待ちなさいよーっ！

きっちり話してもらわよー！！」

エレンはガイアにお辞儀をすると、  
兵士の後を追った。

「ありやりや、

国際問題にならないだろうな」

ガイアは溜め息をつきながらお茶を飲み干した。

「まだ帰ってこないのかしら」

王妃の部屋のバルコニーで  
朝食を取っていた白雪が、  
ミルクの入ったカップを振り上げた

「お行儀悪いですよ白雪」

王妃が叱咤するが白雪はフンと鼻をならし、

「怒るエレンが今はいない！」

踊るように身をくねらせた。

「でも良かったね。」

城の人達も、みんな昨夜のことに  
気付いていないみたいだし、

お父様もいつも通りに戻ったし。

「一軒落着よね」

白雪はフォークを振りながら、

健康診断の名目で連れてこられた馬達を、  
城から連れ出している兵士達を見下ろした。

健康診断は無事に終わり、

今日馬達はそれぞれの厩に帰っていくのだ。

里帰りしていたカーラも今日の午後、  
帰ってくる予定である。

エレンは兵士を一人連れて、  
ラズベリーを取りに早朝森へ・・・。

誰にも知られることなく、  
事は収まった。

「まるで夢を見ていたよう」

王妃はグラスに映る自分の顔を見詰め呟いた。

「あ、帰ってきた！」

溜め息のような王妃の言葉を、  
白雪の元気な声が阻んだ。

「わーい、

今日のティータイムは

ラズベリーパイよ、お母様！」

白雪は手を組んで瞳を輝かせると、  
エレンに手を振った。

それに気付いたエレンが手を振り返した時、  
森から一陣の風が吹き上がった。

風は城内の中庭を駆け抜け、  
城壁を登るように進むと、  
白雪と王妃のもとまで届いた。

テーブルクロスが、

白雪のドレスの裾が、  
王妃の長い金髪が風になびく。

その風は春を告げる  
今年初めての暖かな風だったのだ。

春一番が吹いた日の翌日、  
白雪は十五才の誕生日を迎える。

おわり

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0229g/>

---

祝願鏡

2010年10月28日08時21分発行